

令和4（2022）年度

京都芸術大学 舞台芸術学科

自己点検・評価報告書

令和5（2023）年8月

京都芸術大学 芸術学部 舞台芸術学科

目次

はじめに.....	5
I 理念・目的.....	7
1 学科の教育目標、人材育成目標は大学・学部の理念・教育目標に照らして、適切に設定し、教職員、学生、社会に周知、公表しているか.....	7
① 大学の使命・目的、教育目標.....	7
② 学科の教育目標、人材育成目標.....	7
③ 学科の教育研究上の目的.....	9
④ 自己評価.....	11
II 学生の受入れ.....	13
1 求める学生像および入学者選抜の基本方針（アドミッション・ポリシー）を明示し、公正かつ適正に学生募集および入学者選抜を行っているか.....	13
① 入学者選抜の基本方針（アドミッション・ポリシー）と周知.....	13
② アドミッション・ポリシーに沿った入学者受け入れの実施とその検証.....	13
③ 自己評価.....	15
2 学科魅力（特色）には訴求力があり、適切な入学者数を確保できているか.....	15
① 学科魅力（特色）の訴求力.....	15
② 入学定員に沿った適切な学生受け入れ数の維持.....	19
③ 自己評価.....	19
III 教育研究.....	21
1 教育体制.....	21
① 教員像（教員に求められる能力・資質）や教員組織の編成方針.....	21
② 教員の職能開発.....	25
③ 教育研究活動を行う環境や条件.....	28
④ 自己評価.....	32
2 体系的カリキュラム.....	32
① DP とカリキュラムとの連関（教育目標との整合性、スコープ）.....	32

② CP とカリキュラムとの連関（順次性・系統性／シーケンス）	35
③ 教育研究目的（学術分野）に対する教育内容・水準の適切性	42
④ 自己評価	43
3 教育内容・教育方法	44
① シラバスに基づいた授業の実施	44
② 成績評価	45
③ 単位認定	49
④ 教育方法の工夫・開発と効果的な実施	50
⑤ 自己評価	55
4 学修支援	56
① 学修支援体制	56
② キャリア支援	59
③ 自己評価	59
IV 学修成果・教育成果	61
1 学習成果・教育成果	61
① 教育内容・学修指導「学生生活・学習アンケート」	61
② 教授力 授業改善アンケート	62
③ 初年次教育力 「1年次離籍率」	63
④ 標準卒業年限での卒業率	64
⑤ カリキュラムの各段階に応じた目標達成度	66
⑥ 自己評価	74
2 進路状況	74
① 人材育成目標に対する達成状況	74
② 進路決定率と進路指導力の改善	77
③ 進路の質向上のための学部目標の達成状況	78
④ 自己評価	80
V 内部質保証	82
1 学習成果・教育成果の検証方法	82
2 学科組織レベル・教員個人レベルでの自己点検・評価	82

3 自己評価.....	83
おわりに.....	84

はじめに

京都芸術大学の建学の精神と志は、学校法人瓜生山学園・京都芸術大学の創設者、徳山詳直による「京都文藝復興¹⁾」と「藝術立国 一平和を希求する大学をめざして²⁾」の中で語られている。「二十世紀は、科学と技術の長足とはうらはらに、混沌と汚濁に満ちた世紀であった³⁾」と過去を批評的な視点で振り返った言葉から始まる「京都文藝復興」は、その後、反省と苦悩から見出した人間の可能性を語り、理想の実現に向けた大学の使命を提言し、締めくくられている。また、A4にして7ページに及ぶ瓜生山学園発足30年を機に綴られた「藝術立国 一平和を希求する大学をめざして¹⁾」には、大学を含む学園全体の新たな30年の展望が語られている。

京都芸術大学の「大学の使命・目的」、「教育目標」は、「京都文藝復興」と「藝術立国 一平和を希求する大学をめざして¹⁾」にある建学の精神と志を簡潔に再表現している。これらの全文は、次の章で掲載する。

舞台芸術学科は、2000年に設立された「映像・舞台芸術学科 舞台芸術コース」を前身として2007年に新設された。2000年には、「京都文藝復興の拠点⁴⁾」とも称される京都芸術劇場 春秋座、studio21が設立されたが、本学科は、舞台芸術コースの時代から変わらず、これらの劇場を「教室」として使い「同時代の創造の現場を大学における教育とダイナミックに結び付けていく⁵⁾」ことを方針として、これらの劇場で実施される「発表公演」を主たる成果物と位置付けている。また、「総合芸術」である舞台芸術の担い手として、協働を重んじ、他者とともに新たな価値観を創造できる人材の育成を目指していることも、「演技・演出コース」と「舞台デザインコース」の2コースから成る「学科」となった今も変わっていない。

一方この20年間で、日本の「舞台芸術」、とりわけ本学科が扱っている「現代演劇」の領域における芸術的傾向やその市場構造は、大きく変容している。それにともない、「舞台芸術コース」は、前衛演劇や前衛舞踊を創作するコースとしてスタートしたが、今では、ミュージカルを導入し、エンターテインメントも視野に入れた幅広いジャンル、スタイルの作品に取り組んでいる。また、劇場を取り巻く工業技術の大きな進展も学科教育のあり方に変化を及ぼしている。劇場における機構、音響、照明設備や機材等は、瞬間にデジタル化が進み、日進月歩の勢いで新たな技術が採用されている。また、プロジェクション・マッピングを駆使した舞台映像も舞台技術（舞台デザイン）の一分野として認識されるようになった。京都芸術劇場の二つの劇場にも業界標準と照合した設備や機材が導入されており、本学科「舞台デザインコース」では、これらの技術を使いこなす技能の修得が必須となっている。また、「演技・演出コース」でも、こうした工業技術に対応できる演技力の修得が求められている。

ここで、「京都文藝復興」冒頭の言葉に戻りたい。繰り返しになるが「二十世紀は、科学と技術の長足とはうらはらに、混沌と汚濁に満ちた世紀であった⁶⁾」とある。私たちは、「科学と技術の長足」に逆らうことはできない。では、未来を再び「混沌と汚濁」で満たさないために、いかに科学や技術と共存していくべきなのだろうか。私は、一演劇人、また舞台人として、これらを享受しながらも常に批評的な視点を持つことが大切なのだと考える。「舞台芸術」は、人間が同じ時間と空間を共有することで成立している一回性の芸術（ライブ・アート）である。つまり「舞台芸術」は、科学と技術だけでなく、常に演者と観客という人間がそこに存在してこそ成立する芸術である。

「京都文藝復興」では、「果たして人間とは何か⁷⁾」と問いかけている。舞台芸術学科は、舞台芸術の創造を通して、この問いへの応答を見出していける学科でありたい。そしてまた、「科学や技術の長足」を人々の幸せのために用いる術を見出していける学科でありたい。

2023年8月
京都芸術大学 舞台芸術学科
学科長 平井愛子

I 理念・目的

1 学科の教育目標、人材育成目標は大学・学部の理念・教育目標に照らして、適切に設定し、教職員、学生、社会に周知、公表しているか

① 大学の使命・目的、教育目標

以下、「大学の基本使命」、「建学の理念」、「教育目標」を大学ホームページ在学生用専用サイト⁸に掲載し、学生に広く周知している。

大学の基本使命

芸術を学ぶ者たちが、来るべき文明の姿を思い描き、人類危機の時代を克服するという強い意志をどう身につけるか。そしてまた、他者の痛みに想像力を働かせ、多くの人々の幸せのために芸術の力を用いる姿勢をどう培うか。すなわち、良心をもって社会を変革する芸術家魂をどう育てるか。

芸術立国とは、芸術立国を担う人間の成長にほかならない。芸術文化を原動力とする文明への展望と、人類と自然への深い愛情に満ちた哲学を持った人間を輩出する。それこそが、本学の最も重要な使命である。

建学の理念

芸術と哲学によって、新しい人間観、世界観の創造を目指す。

教育目標

人類が直面する困難な課題を克服するために、「人間力」と「創造力」を鍛え、社会の変革に役立てることのできる人材を育成する。

これらは、京都芸術大学創設者・徳山詳直によって2000年4月に提唱された「京都文藝復興⁹」と学校法人瓜生山学園発足から30年の節目となった2007年に大学を含めた学園全体の指針と展望を改めて提示した「芸術立国 ―平和を希求する大学を目指して―¹⁰」を簡潔に要約、再表現している。これらの本文は、本学ホームページ等で公開し、学内外に周知されている。また「京都文藝復興」は、毎年、本学入学式において朗読されている。

② 学科の教育目標、人材育成目標

〈学科沿革〉

舞台芸術学科は、2000年度に設立された「映像・舞台芸術学科―舞台芸術コース」を前身とし、2007年度の改組に伴い「舞台芸術学科」として新設された。

2000年度「映像・舞台芸術学科」設立当時の学科長だった1970、80年代の小劇場演劇の旗手、太田省吾は、「第一線で国際的に活躍する演出家や振付家・ダンサー、批評家らを専任教員として招聘し、同時代の創造の現場を大学における教育とダイナミックに結び付けていく¹¹⁾」ことを方針とした。また、カリキュラムにおいては、「劇場をもつ大学という他の大学にない特色を生かし、2年次以降の実習授業では、京都芸術劇場 春秋座、studio21¹²⁾を中心に、プロフェッショナルな活動の場に近似した現場で、それぞれの志向に応じて役割を分担しながら、共同作業による作品創作が続けられた¹³⁾」としている。さらには、「劇場での多彩な作品鑑賞、海外の大学やアーティストとの交流、舞台芸術研究センター¹⁴⁾の活動との連携など、さまざまな貴重な経験と表現の追及を重ねていくことを通して、学生は自身の作品がどのように社会化されていくのかを問い、集団での活動に必要な社会性（コミュニケーション能力）を体得¹⁵⁾」することで主に前衛演劇、前衛舞踊（コンテンポラリー・ダンス等）の担い手を育てることを学科目標としていた。

「舞台芸術学科」として2007年度に発足以降は、概ねの方針・目的やカリキュラムは踏襲しながら、前衛演劇や前衛舞踊に加え、スタニスラフスキー・システム¹⁶⁾等を基本理論とした既存の演劇スタイルの作品創造も導入された。2009年度からは、「演技演出コース」、「ダンスコース」、「舞台デザインコース」の3コース編成となったが、2013年度からは「ダンスコース」と「演技演出コース」を統合して「演技・演出コース」とし、「舞台デザインコース」の2コース編成となり現在に至っている。

2コース編成となったことを機に「演技・演出コース」は、米国 Bachelor of Fine Arts（以下、BFAと記述）の演技プログラム（Ⅲ-2-③で詳細）に倣った演技修得を主たる目的としたカリキュラムを導入、「舞台デザインコース」は、音響、照明、舞台美術など舞台を構成する各領域をより専門的に修得できるカリキュラムへと移行した。さらに、2019年度から演劇（ストレートプレイ）に加えて「ミュージカル」と「声優」を導入、エンターテインメントまでを視野に入れたカリキュラムに拡張された。

〈学科教育目標・人材育成目標〉

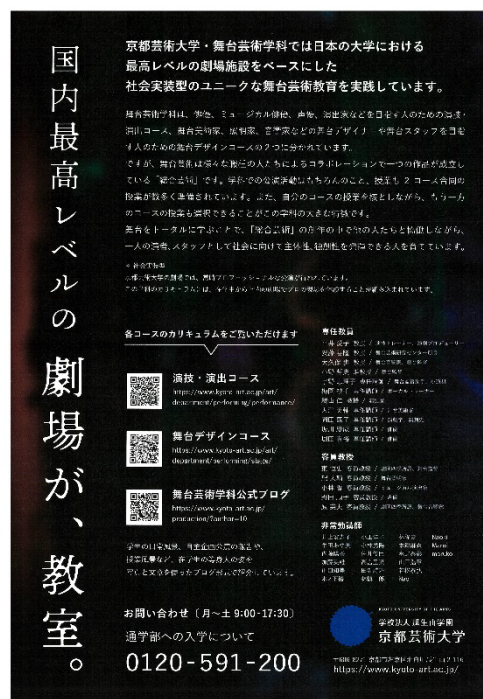
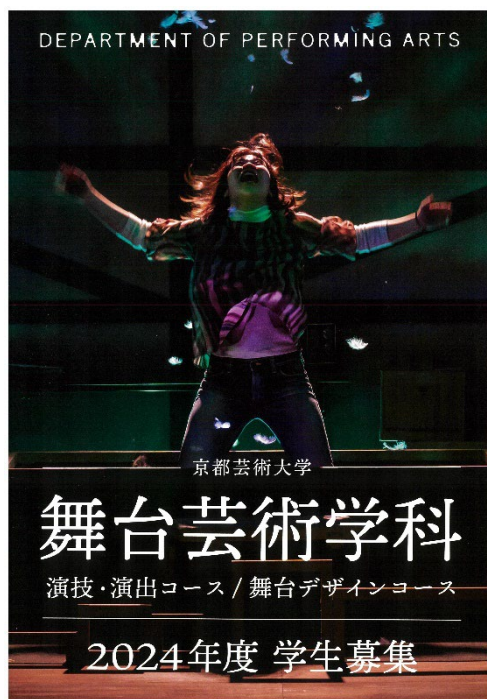
舞台芸術学科は前述の通り変化してきたが、2000年度の「映像・舞台芸術学科—舞台芸術コース」発足以来変わらず「京都文藝復興の拠点¹⁷⁾」たる学内の劇場で実施する授業発表公演や卒業制作公演を主たる成果物としている。また、学科として取り組む舞台作品のジャンルやスタイルは変化してきたが、「舞台芸術」が役職や役割の異なる人たちが同じ目標に向かい協働することで成立している「総合芸術」であることに変わりはない。

ゆえに舞台芸術学科では、舞台芸術学科の「教育目標」（人材育成目標）は次の通りとしている。

舞台芸術は、新たな価値観の創造に向かって様々な役職の人たちが各自の独創性を発揮しながら協働、協調することで生まれる「総合芸術」です。舞台芸術学科では主体

性ある豊かな「創造力」と、他者を信頼し、また他者から信頼される「人間力」とを兼ね備えた「総合芸術」の担い手となるべく人材を育成します¹⁸。

「教育目標」（人材育成目標）は、本学ホームページ在校生専用サイトに公開されているほか、新入生学科ガイダンスなどで周知している。また、学生募集のために作成している「学科チラシ¹⁹」においても高校生に向けて簡潔に要約した内容を掲載している。



③ 学科の教育研究上の目的

「舞台芸術」を取り巻く学術的な進展状況を考えた時、デジタル技術等のテクノロジーの発展を無視することはできない。劇場機構、舞台装置（美術）、音響、照明、さらには今や舞台技術の一分野として欠かすことができない舞台映像など各舞台技術領域において、デジタル技術はソフト、ハードともに日進月歩の勢いで進展している。学生が授業発表公演等の演習を実施する京都芸術劇場 春秋座、studio21においても音響、照明、映像設備はデジタル化され、業界における標準的機材の導入が進められている。それにともない舞台芸術学科では、これらの工学的技術が生み出す効果を駆使して実際に表現できる人材を育成する必要がある。また、「舞台芸術」の創造においては、他分野との協働も必

須条件である。この多様な工学的技術の効果的で有意義な協働は、テクノロジーではなく人間の力によってはじめて実現される。従って、舞台芸術学科では、工学的技術に対応する理解と技能に加え、それらを駆使して他分野の他者と協働できる人材を育成する必要がある。さらには、舞台芸術は、舞台技術が人間（パフォーマーと観客）と時空を共有することで、はじめて成り立つ芸術である。従って、テクノロジーを享受しながら、常にそれに対して批評的な視点を持つことで人間的芸術性を理解できる人材を育成する必要がある。

翻ってパフォーマー（俳優）や演出家の側から今日の状況を観ると、テクノロジーを駆使した舞台技術を自らの表現を補強する術と捉えることができる知識と技能が必要である。本学科では、これまでの自らの芸術的解釈と表現技術を共演者との協働を通して表現する能力を不可欠な基礎としながらも、各分野における工学的技術が自らに与える影響や自らがそれらに与える影響を俯瞰的に理解することで、テクノロジーと協働できるパフォーマーや演出家を育成する必要がある。この新たな協働を可能にするために、パフォーマーや演出家もまた、テクノロジーを享受しながらも、それに対する批評性を持つことが大切となる。

次に市場規模とその変移から「舞台芸術」を観てみる。舞台芸術またはライブ・アートとしての市場規模は、音楽業界なども含むとその領域が広いことから全体的な規模を把握することは困難である。しかしながら、「舞台芸術」全般が2020年度以降、コロナ禍による甚大な影響を受けた業界であることは間違いない。文化芸術推進フォーラムの「調査報告書²⁰」はコロナ禍の影響について次の通り報告している。

影響を端的に表すものとして、芸術活動による事業収入（芸術収入）について注目すると、2020年通期の減少率は2019年と比べ、ほぼ全てのジャンルで-50%を超える。これは、広くコロナ禍によって多大な影響を受けたと考えられている飲食業（-26.6%）、宿泊業（-37.2%）を大きく上回るばかりか、航空業（-51.7%）と同等以上の減少規模となる。

コロナ禍によって活動の縮小を余儀なくされたばかりか、中小規模の劇団等では活動停止に追い込まれた団体も少なくない。そのような中、商業演劇は復調の兆しを見せているが、2022年には驚異的な復活を実現したのが2.5次元ミュージカル（以下、「2.5次元」と表記）だ。日本のミュージカル界を支える劇団四季でさえも「四季の売上高は、2019年との比較で2020年は30%と大幅減。しかし、2021年は同60%。22年も夏までは公演回数、売り上げとも順調に伸ばしてきた²¹」とし23年までには元の状況に戻ることを目標としている。一方、2.5次元は、ぴあ総研のライブ・エンタテインメント市場調査によると2021年の市場規模は239億円と推定され²²、コロナ禍の影響を受けた前年から大幅に

回復したばかりか、ぴあ総研が統計を取り始めて以来の最高額を記録した。また、2010年の市場規模は19億円程度だったが、この10年で12倍以上に膨れ上がったことになる。

市場規模の拡大に比例して、舞台芸術学科も2.5次元に関心を持つ学生が年々増えている事実を考えると、これまでのブロードウェイ型ミュージカルに加えて2.5次元も視野に入れていく必要がある。マンガやアニメ、ゲームなどを原作とした2.5次元では舞台化において忠実な視覚的再現が求められる。つまり、2.5次元は、それら原作となっている媒体との協働が不可欠なジャンルだと言える。従って、舞台芸術学科は、本学キャラクターデザイン学科などとの学際的展開を目指し、原作となっている媒体に対する理解を深めていきたい。また、2.5次元では、舞台映像等の高度なテクノロジーが求められる。従って、2.5次元の導入には、前述のテクノロジーの進展を意識したカリキュラムが不可欠と言える。

ゆえに舞台芸術学科では、24年度からの「教育目標」を次の通りとしている。

舞台芸術は、様々な職種の人たちが独創性を発揮しながら一つの目標に向かって協働することで生まれる「総合芸術」です。そして今や、テクノロジーと人間が同じ時空を共有し協働することで生まれる「総合芸術」でもあります。舞台芸術学科では、「総合芸術」の創造を通して、他者を尊重しながら主体的に創造できる力と先端的科学技術を芸術的創造に生かせる力とを兼ね備えた現代社会の発展と問題解決に貢献できる人材を育てます。

④ 自己評価

本学は、『藝術立国²³』のサブタイトルにあるように「平和を希求する大学」を目指している。では、「平和」とはいかに育まれるものなのか。そして、『京都文藝復興²⁴』には、(20世紀は)「国家、宗教、民族間の果てしない対立と闘争、貧困と飢餓と殺戮の悲しむべき世紀であった」とあるが、「平和」の対極にある「対立」、「闘争」、「殺戮」は、なぜ起こるのだろうか。私たち人間は各々が異なる価値観を持っているが、互いの相異を認められず自らの優位性を独善的に強調したときに「対立」、「闘争」、「殺戮」に発展するのではないだろうか。翻って「平和」は、他者の価値観に共感し、他者との違いを自らの視野を広げる原動力としたときに生まれるものだと考える。

舞台芸術学科の「教育目標」(人材育成目標)では、「他者との協働」を強調しているが、協働力を身につけることは、「平和」を育むために必要不可欠な力だと言える。さらに、24年度カリキュラムの「教育目標」(以下、「24年度版」と表記)では、「テクノロジーとの協働」も加筆している。『京都文藝復興²⁵』の冒頭に「二十世紀は、科学と技術の長足の進歩とはうらはらに、混沌と汚濁に満ちた世紀であった」とある。また、「果たして人間とは何か」と問うている。24年度版では、「他者を尊重しながら主体的に創造

できる力と先端の工学技術を芸術的創造に生かせる力を兼ね備えた現代社会の発展と問題解決に貢献できる人材を育てます」とし、「科学と技術」を人々の幸せのために活かすことを目標としている。また、「テクノロジーとの協働」を通して「果たして人間とは何か」を探求していくことを目標に掲げている。

以上から、舞台芸術学科の「教育目標」（人材育成目標）は、大学の理念・目的に照らし適切に設定されているものとする。

II 学生の受入れ

1 求める学生像および入学者選抜の基本方針（アドミッション・ポリシー）を明示し、公正かつ適正に学生募集および入学者選抜を行っているか。

① 入学者選抜の基本方針（アドミッション・ポリシー）と周知

京都芸術大学芸術学部は、「教育目標」を踏まえアドミッション・ポリシーを以下の通り定めている。

京都芸術大学芸術学部のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーに掲げる「創造力」「人間力」、およびそれらを構成する「7つの能力」を身につけようとする意欲と素養を持った人の入学を期待しています。そのため、入学までに以下の能力や態度を身につけた人を求めています。

- ◆ 生涯を通じて学び続けるための基盤としての基礎的・基本的な知識・技能を習得した人
- ◆ 知識・技能を活用して、答えが一つに定まらない課題を解決できる思考力・判断力・表現力を習得した人
- ◆ 主体性を持って積極的、社会的に多様な人々と協働して学ぶ態度を身につけた人

上記を身につけた多様な入学希望者を評価するために、表現技術の優劣だけにとらわれない、多角的な評価基準を備えた入学試験を実施します。

アドミッション・ポリシーは、以下の方法により広く周知している

- ・ 「入試の手引き&学生募集要項²⁶⁾」、本学ホームページ「入試情報²⁷⁾」ページに掲載
- ・ オープンキャンパスや各種説明会、出張講義、特別講義、高等学校訪問等において、教育目標及び教育課程の特色とともにアドミッション・ポリシーについて説明²⁸⁾

② アドミッション・ポリシーに沿った入学者受け入れの実施とその検証

2021年度自己点検評価報告書²⁹⁾において、「公正かつ妥当」に入試を運用していることを以下の通りに明記している。

公正かつ妥当な入試を運用するため、入試部長を責任者、アドミッション・オフィス
を所轄部署として各入学試験を実施している。また入試試験問題については、専任教
員によって構成された「入試出題委員会」が作成及び採点を行っている。

試験当日は入試部長、事務局長、入試出題委員が待機し不測の事態に備えており、ア
ドミッション・オフィスによる運営のもと円滑な試験の実施に努めている。なお、合
否判定は学科毎の判定結果をもとに、「代表教授会」の審議を経て学長が合格者を決
定している。

アドミッション・ポリシーに沿った学生を受け入れるため、すべての入試において、
高等学校までの基礎的な学習に実直に取り組んできたかの継続力を評価するととも
に、各入学試験で以下の指標を設定している。

体験授業型選抜（Ⅰ期・Ⅱ期）

1. 授業に臨む姿勢に、授業を通して新しいことを学びとろうとする探究心が見られ
るか。
2. 初めて取り組む課題であっても、積極的に挑戦しようとする行動力が見られる
か。
3. 出された課題に対して、様々な可能性を比較検討したうえで自らの答えを導き出
す思考力、発想・構想力が見られるか。
4. 授業を通して、教員のアドバイスや他の学生の考え方に耳を傾け、相互に理解し
ようとする努力が見られるか。

科目選択型選抜（Ⅰ期・Ⅱ期）

1. 高校までの基礎的な学習に実直に取り組んできた継続力が見られるか。
2. （鉛筆デッサン）芸術を学ぼううえで必要な基礎力としての「観察力・構成力・表現
力」が身についているか。
3. （小論文）芸術を学ぼううえでの基礎力としての「読解力・論理的思考力・文章表現
力」が身についているか。
4. （国語・英語）高校までの基礎学力「基本的知識・文章読解力等」が正しく身につ
いているか。

面接型入学試験（Ⅰ期・Ⅱ期）

1. 高校までの基礎的な学習に実直に取り組んできた継続力が見られるか。
2. 芸術に限らず、部活動、ボランティア活動など情熱を持って打ち込んだものがある
か。
3. 本学で自分を成長させようとする意欲があるか。

大学入学共通テスト利用型入試（Ⅰ期・Ⅱ期）

1. 高校までの基礎的な学習に実直に取り組んできた継続力が見られるか。
2. 芸術を学ぶうえでの基礎力としての「基本的知識・文章読解力・論理的思考力」が各教科において身につけているか。

以上の、指標は「入試ガイド&学生募集要項³⁰」、本学ホームページ「入試情報³¹」のページに記載されている。

③ 自己評価

本学では、「教育目標」を踏まえた「アドミッション・ポリシー」が適切に策定され、「入試ガイド&学生募集要項」（冊子）や大学ホームページに掲載することで入学希望者や保護者等に向けて広く周知されている。

一方で、「アドミッション・ポリシー」にある【入学者に求める資質／能力】にある項目と各入試の指標との結び付きがやや曖昧に感じられる。例えば、項目3は、「主体性を持って行動し、多様な人々と協働して学ぶ態度を身につけている³²」とあるが、いずれの入試形態においても、項目3で示している資質や能力を評価できる指標が含まれていないことから、修正が望まれる。

入試の運用に関しては、公正かつ妥当に運用され、「アドミッション・ポリシー」に沿った学生募集や入学者選抜が適正に実施されている。

2 学科魅力（特色）には訴求力があり、適切な入学者数を確保できているか

① 学科魅力（特色）の訴求力

大学が定める「求める学生像」（アドミッション・ポリシー）に基づき、舞台芸術学科の「教育目標」（人材育成目標）³³は、以下の通りとしている。

舞台芸術は、新たな価値観の創造に向かって様々な役職の人たちが各自の独創性を発揮しながら協働、協調することで生まれる「総合芸術」です。舞台芸術学科では主体性ある豊かな「創造力」と、他者を信頼し、また他者から信頼される「人間力」とを兼ね備えた「総合芸術」の担い手となるべく人材を育成します。

I-1-②で既述の通り、学科「教育目標」（人材育成目標）は、本学ホームページ在校生ページ等で広く周知されているが、入学希望者への周知には、「教育目標」と学科魅力（特色）を簡潔にまとめた「学科チラシ」を使用している。

「学科チラシ」では、学科「教育目標」を再表現し、学科魅力（特色）とともに、以下の通り掲載している。

京都芸術大学・舞台芸術学科では日本の大学における最高レベルの劇場施設をベースとした社会実装型のユニークな舞台芸術教育を実施しています。

舞台芸術学科は、俳優、ミュージカル俳優、声優、演出家などを目指す人のための演技・演出コース、舞台美術家、照明家、音響家などの舞台デザイナーや舞台スタッフを目指す人たちのための舞台デザインコースに分かれています。

ですが、舞台芸術は様々な職種の人たちによるコラボレーションで一つの作品が成立している「総合芸術」です。学科での公演活動はもちろんのこと、授業も2コース合同の授業が数多く準備されています。また、自分のコースの授業を核としながら、もう一方のコースの授業も選択できることがこの学科の大きな特徴です。

舞台をトータルに学ぶことで、「総合芸術」の創作の中で他の人たちと協働しながら、一人の演者、スタッフとして社会に向けて主体性、独創性を発揮できる人を育てています。

* 社会実装型

京都芸術大学の劇場では、常時プロフェッショナルな公演が行われています。

この学科のカリキュラムには、在学中から学内の劇場でプロの現場を体験することが組み込まれています。

このチラシは、オープンキャンパスで配布しているほか、以下のイベント等で配布している。

2022 年度

- ・ 近畿高校演劇研究大会 500 部

2023 年度

- ・ 2023 かごしま総文演劇部門（高校演劇全国大会）2000 部
- ・ 全国高等学校書道パフォーマンス選手権大会 1000 部

学科の魅力（特色）が最も反映される入試である「体験授業型選抜」においては、以下の通り実施している。

【演技・演出コース】

〈授業の狙い〉

体験授業型選抜は、オーディションではなく体験授業です。ですから、今あなたが持っている演技力よりも、課題に向き合う姿勢や一日を通して成長度、発見、気付きを重視します³⁴。

としたうえで、午前中は、コミュニケーションに焦点を当てた基礎エクササイズを実施、他者とともに有機的な対話形式の演技を学ぶことを狙いとしている。午後は、エントリー者の希望に沿って「演技チーム」、「ダンスチーム」、「歌唱チーム」に分かれて実施。いずれのチームにおいても、冒頭には課題の台本、振付、楽曲を自分なりに演じてみる、踊ってみる、歌ってみることから始め、授業を経て最後に発表することでエントリー者本人も評価者も成長度が高かれる授業構造にしている。また、発表後には振り返りを実施し、気づきや学びを口述させている。

〈評価ポイント〉

- 1) 冒頭と最後の発表：課題の体験的理解力、コミュニケーション能力、表現力
- 2) 振り返りでの口述内容、レポート内容：課題理解力、自己分析力、論理構想力、言語表現力

【舞台デザインコース】

〈授業の狙い〉と〈評価ポイント〉

- 1) モチーフ（戯曲の抜粋）を読み込み、デザインを考えることはできるか：デザイン力
- 2) レクチャーを生かして修正する力はあるか：理解力
- 3) 作業に臨む姿勢を通して、継続力、集中力はあるか：継続力、集中力
- 4) 作品のプレゼンを通して、人に意見を発信する力はあるか：コミュニケーション能力
- 5) グループワークを通して他者とのコミュニケーション能力はあるか：協働力

また、教員との1対1の面談を通して積極性や熱意を評価する。

いずれのコースの授業も1日の最後は合同で「舞台芸術とは何か」を考えるワークショップを実施。コミュニケーション能力、思考力、論理構成力を評価している。

体験授業型 OC から入試までのエントリー率 (%)

(体験入学 OC に参加したコースと同じコースにエントリーした数を抽出)

	2019	2020	2021	2022	2023
学部全体	55.7	57.4	57.9	64.1	65.5
演技・演出	45.2	62.2	48.8	64.0	68.6
舞台デザイン	60.2	63.4	59.7	63.0	63.8
舞台芸術学科	52.3	62.9	54.5	63.4	65.7

※2022年より第3希望までエントリー可能となったためエントリー率向上

体験授業型選抜出願可者の出願率 (%)

	2019		2020		2021		2022		2023	
	夏コ ミ入	秋コ ミ入	夏コ ミ入	秋コ ミ入	体験 I期	体験 II期	体験 I期	体験 II期	体験 I期	体験 II期
学部全体	78.1	91.8	78.8	94.0	75.2	-	66.8	82.2	69.6	80.2
演技・演出	89.6	66.6	88.4	66.6	72.0	-	74.0	100.0	72.4	60.0
舞台デザイン	60.7	100.0	79.3	100.0	70.9	-	74.0	80.0	78.5	85.7
舞台芸術学科	75.4	93.3	83.6	83.3	71.4	-	74.0	87.5	75.4	70.5

入学試験結果 (志願者推移)

	2019	2020	2021	2022	2023
学部全体	5,151	7,138	7,028	8,044	8,873
演技・演出	217	303	235	211	238
舞台デザイン	288	398	376	308	336
舞台芸術学科	505	701	611	519	574

入学試験結果（2007年度からの志願者推移）

	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
舞台芸術学科	360	116	146	151	243	186	150	222	215

2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
239	253	381	505	701	611	519	574

② 入学定員に沿った適切な学生受け入れ数の維持

舞台芸術学科の収容定員充足率は、以下の表の通りに推移している。2021年度は、「演技・演出コース」が0.96となっているが、「舞台デザインコース」1.1とすることで学科内において適正値に調整している。

	定員 ~2022	定員 2023~	2019	2020	2021	2022	2023
学部全体	910	975	1.08	1.06	1.07	1.08	1.07
演技・演出	30	30	1.03	1.03	0.96	1.06	1.06
舞台デザイン	30	30	1.10	1.00	1.10	1.06	1.03
舞台芸術学科	60	60	1.06	1.01	1.03	1.06	1.05

③ 自己評価

舞台芸術学科では、学科魅力の訴求力を向上させるために、毎年「体験授業型OC」、「体験授業型選抜」の授業内容、授業構造、評価基準の検証と見直しを実施してきた。その成果として、「体験授業型OCから入試までのエントリー率」は、学部平均以上または同程度を維持している。また、「体験授業型選抜出願可者の出願率」、特に出願可者数が多いため数値の信頼度が高いI期においては、2021、2022年度と学部平均と比較してもかなり高水準を維持している。「志願者数推移」については、2020年に大幅増となった後、2021年には減少に転じている。2020年度の増加は、学科と劇団四季との提携やカリキュラムにミュージカル、声優領域を導入したことが要因と考えられる。一方で、2021、2022年度の減少は、コロナ感染拡大に因るものと考えられる。前述通り、「舞台芸術」はコロナによる大きな打撃を受けた業界だが、その影響は業界だけに限らず、高等学校の演劇部や文化祭クラス演劇などの活動が停止、または縮小された。実際に、特に本学科演

技・演出コース生の約半数が高校演劇出身である。また、文化祭クラス演劇での体験を動機に舞台芸術学科に入学してくる学生も少なくない。従って、コロナ禍によって、高校生たちが観劇体験や実際的な演劇体験を奪われたことが舞台芸術学科の学生募集に影響したと考えられる。しかしながら、2023年度に入り、演劇部も文化祭もほぼコロナ禍前と変わらない活動が可能となった。2024年度募集のOCワークショップ受講者数などからも今後は2020年度並み、もしくはそれ以上に志願者が増加すると考えている。

舞台芸術学科は、2007年度以降、コース分けやそれに伴うカリキュラムや方向性を見直し、体験授業内容の修正等を積極的に実施し、訴求力向上に努めてきたが、「2007年度からの志願者推移」を観ると、その成果が数字に顕著に反映されていることがわかる。

「入学定員充足率」に関しては、適正な数値を維持していると考えられる。

Ⅲ 教育研究

1 教育体制

① 教員像（教員に求められる能力・資質）や教員組織の編成方針

〈教員に求められる能力・資質〉

本学教員の「求められる人物像」は、「目指すべき教員像・教育業績評価指標³⁵」において以下の通りに掲げられている。

藝術立国の理念を理解し、多様性を受容しながら、職務に対して高い倫理観と自己研鑽する姿勢を保ち、誠実かつ積極的に職務に取り組む

さらには以下の通り、職務領域を4領域に分け、各領域別の「求められる人物像」と「役割」が掲げられている。

1. 教育：授業の質を高め、指導法を開発するなど教育改革を推進する
 - ◆ 質の高い授業と指導法を開発できる人材
 - ◆ 個人・組織レベルにおいて教育改革を推進できる人材
 - ◆ 高度な専門的能力を学際的な展開へとつなげられる人材
2. 学生支援：大学生生活全般における環境改善を推進し、学生の目標達成を支援する
 - ◆ 学生の生活・学習環境に関心を持ち問題解決にあたる人材
 - ◆ 学生の履修促進・進路決定のための施策を探求し実践する人材
 - ◆ 学生のプライバシーや多様性を理解しサポートする人材
3. 大学運営：組織運営の重要性を深く理解し、主体性と責任感を持って職務を全うする
 - ◆ 学部・学科の運営に積極的に参画し協働する人材 60.9
 - ◆ 委員会活動や大学行事に積極的に参画し成果をあげられる人材
4. 研究制作・社会貢献：建学理念の実現に資する研究・制作活動を通して、その成果を教育と社会に還元する
 - ◆ 研究・制作活動に取り組み特色ある成果を発信する人材
 - ◆ 高度な専門的能力により地域社会や産官民との連携を推進する人材
 - ◆ 社会に貢献する活動に参画し大学のブランド力向上に寄与する人材

舞台芸術学科では、「求められる人物像」と「役割」に基づき、「舞台芸術」を構成する各領域の専門家を専任教員としている。専任教員は、初年次から4年次までの体系的なカリキュラムを各々が運営しながら、学科の主たる成果物である「授業発表公演」や「卒業制作公演」の実施に向けて綿密に連携している。専任教員の構成、専門分野、学科での役割は以下の通り。

専任教員一覧（2023.4.1時点）

教員名	年齢	職位	専門分野・領域	学科での役割
平井愛子	50代	教授	現代演劇、演技トレーナー、演劇プロデューサー	<ul style="list-style-type: none"> ・学科長として学科運営全体の統括 ・演技・演出コース主任として1年次から4年次までの演技・演出コースのカリキュラム運営 ・すべての授業発表公演、卒業制作公演のプロデュース業務（マネージメント） ・3年次演技・演出コース生、および成績不振学生の担当教員 ・舞台芸術研究センターとの連携責任者
安藤善隆	50代	教授	編集、舞台芸術、ライティング、文芸、企画・プロデュース	<ul style="list-style-type: none"> ・附属機関 舞台芸術研究センター 所長・「卒業研究・制作」統括
大久保歩	60代	教授	舞台音響家、舞台監督	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台音響領域の指導責任者 ・studio21 音響設備・機材の管理責任者 ・音響領域における入試を含む学生募集責任者 ・卒業制作公演、自主企画公演のバックステージ責任者（公演毎担当制） ・音響領域の科目履修者のキャリア指導
鶴山 仁	70代	教授	演劇（舞台演出）	<ul style="list-style-type: none"> ・2年次授業発表公演 演出／統括 ・演劇系志望者のキャリア指導
小野哲史	40代	准教授	舞台進行、安全管理、特殊効果、舞台転換、高所作業	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台デザインコース主任として1年次から4年次までの舞台デザインコースのカリキュラム運営 ・舞台監督領域の指導責任者 ・すべての授業発表公演、卒業制作公演の安全管理責任者 ・舞台デザインコース学生募集、入試業務の責任者 ・舞台監督領域の科目履修者のキャリア指導

宇野恵理子	30代	専任講師	安全管理、劇場管理、舞台進行	<ul style="list-style-type: none"> ・初年次安全ライセンス指導の責任者 ・舞台デザイン領域初年次、および基礎科目担当 ・卒業制作公演、自主企画公演のバックステージ責任者（公演毎担当制） ・舞台デザインコース一般就職希望者のキャリア指導
梅園紗千	40代	専任講師	ミュージカル	<ul style="list-style-type: none"> ・ボーカル科目、卒業研究を含むミュージカル公演科目の指導責任者 ・ミュージカル領域における学生募集責任者 ・ミュージカル領域への進路希望者のキャリア指導
大津英輔	40代	専任講師	舞台美術	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台美術領域の指導責任者 ・舞台美術領域の入試業務を含む学生募集責任者 ・すべての授業発表公演、卒業制作公演の舞台美術／大道具領域の責任者 ・舞台美術領域の科目履修者のキャリア指導
岡田路子	30代	専任講師	演劇研究者、現代演劇	<ul style="list-style-type: none"> ・講義系科目、卒業研究個人研究（論文執筆）選択者の指導責任者 ・体験授業型選抜の審査、採点担当 ・演技・演出コース大学院進学希望者、一般就職希望者の進路指導
坂川慶成	30代	専任講師	現代演技	<ul style="list-style-type: none"> ・初年次、2年次の演技演習を担当 ・演技・演出コースの学生募集を担当 ・俳優志望者のキャリア指導を担当
堀田貴裕	40代	専任講師	現代演劇、時代劇、殺陣指導	<ul style="list-style-type: none"> ・初年次2コース合同科目の指導 ・演技・演出領域の学生募集担当 ・初年次演技・演出コース生の担当教員 ・演技・演出コース「舞台表現演習・殺陣」履修者のキャリア指導

今後は、2024年度の改組と新カリキュラムへの移行をにらみ、「演出」、「舞台照明」、「舞台音響」を専門分野とする教員を任用し、さらに充実した教員体制を組織する計画である。

専任教員に加えて本学科教員組織は、より質の高い教育と体系的カリキュラムの充実した運用を実現するために以下の客員教授、非常勤講師によって構成されている。

客員教授

		担当科目	専門分野
東恒史	50代	舞台デザインⅤ 舞台デザインⅣ	舞台監督
紀大輔	40代	総合演習・照明Ⅰ 総合演習・照明Ⅱ 総合演習・デザインⅡ/	舞台照明
小林香	40代	総合演習・ミュージカルⅠ 総合演習・ミュージカルⅡ	ミュージカル演出
野田順子	50代	舞台応用演習・声優Ⅰ 舞台応用演習・声優Ⅱ	声優
原英夫	60代	舞台デザインⅤ 舞台デザインⅥ	舞台音響家

非常勤講師

		担当科目	専門分野
井上安寿子	30代	舞台基礎演習・伝統芸能Ⅰ 舞台基礎演習・伝統芸能Ⅱ	舞踊家
牛田あや美	40代	作品研究Ⅱ	芸術学・芸術史・芸術一般
内藤陽香	20代	作品研究Ⅲ	演劇学
佐井優臣	30代	舞台創作基礎Ⅰ 総合演習・デザインⅡ	舞台映像
加藤英雄	40代	総合演習・ミュージカルⅠ 総合演習・ミュージカルⅡ	音楽家、ピアニスト
川口知美	40代	総合演習・デザインⅡ 舞台デザイン特講・衣装	衣装家
木ノ下裕一	30代	作品研究Ⅳ	劇団主宰
小玉洋子	50代	総合演習・ミュージカルⅠ 総合演習・ミュージカルⅡ	声楽家
小林勇陽	20代	舞台創作基礎Ⅰ 舞台創作基礎Ⅱ	舞台監督

高宮里菜	40代	総合演習・ミュージカルⅠ 総合演習・ミュージカルⅡ	バレエ・ジャズダンス
田淵詩乃	30代	演技・演出Ⅴ 演技・演出Ⅳ	俳優、現代演劇
林慎一郎	40代	舞台作品特講・劇作	劇作家
林隆史	30代	舞台基礎演習・ボーカルⅠ 舞台基礎演習・ボーカルⅡ 舞台表現演習・ボーカルⅠ	声楽家
本郷麻衣	40代	総合演習・デザインⅠ	舞台制作、演劇プロデューサー
水野泰彰	50代	総合演習・デザインⅡ	小道具
山口浩章	40代	総合演習・演劇Ⅰ 総合演習・演劇Ⅱ	演出家
若松泰弘	50代	総合演習・演技Ⅰ 総合演習・演技Ⅱ	俳優
Nao	30代	舞台基礎演習・ダンスⅠ 舞台基礎演習・ダンスⅡ	ジャズダンス
Naoki	30代	総合演習・ダンスⅠ 総合演習・ダンスⅡ	ジャズダンス
Mami	40代	総合演習・ダンスⅠ 総合演習・ダンスⅡ	ジャズダンス
maruko	30代	舞台基礎演習・ダンスⅠ 舞台基礎演習・ダンスⅡ	ポップダンス

② 教員の職能開発

2008年度の大学設置基準においてファカルティ・デベロップメント（以下、FD）が義務化されて以来、本学でも様々なFDに関する取り組みが行われてきた。2020年度には、FDのさらなる展開を目指し、「FD委員会」が設置された。「FD委員会」は、以下を活動目的としている。

委員会は、本学の教育理念に基づく教育研究活動の資質向上を図るため、組織的かつ体系的なFD（ファカルティ・デベロップメント）活動を推進し、教職員の能力開発を支援することを目的とする³⁶。

FD 委員会では、①**教学マネジメントモデルに基づく体系的な FD 研修計画の立案** ②**新任教員研修の再設計** の 2 項目を重点課題として FD 研修計画を策定している。

①については、これまでの FD 活動を「教育」、「学生支援」、「大学運営・マネジメント」の三領域に分け、「教育」領域をミクロ、ミドル、マクロの三層に整理している。さらに、各層を「フェーズⅠ（導入）」＝「気付く／分かる」。「フェーズⅡ（実践）」＝「実践できる／開発できる」、「フェーズⅢ（支援）」＝「教えられる／支援できる」に分けることで受講者（教員）が自らの習熟度を認識できるようになっている。

②については、新年度冒頭に実施する「ウェルカム研修」に始まり、入職後 2～3 年をかけて「教育」、「学生支援」、「大学運営」に対応する力を修得できるようにプログラムされている。（以上、「FD のてびき 2022³⁷」を要約）

2022 年度は、以下の FD 研修が実施された。

- ・ 新任教員に向けた、ガイダンス的内容の「ウェルカム研修*」
- ・ シラバス作成と、評価方法について学ぶ「授業デザインⅠ」
- ・ DP・CP に基づくカリキュラム編成について学ぶ「カリキュラムマネジメントⅠ」
- ・ 学生とともに理想のカリキュラムツリーを作成する「カリキュラムマネジメントⅡ」
- ・ 傾聴・コーチングといったアクティブラーニングについて学ぶ「コーチング研修」
- ・ 他領域の授業現場から学ぶ、オンライン授業参観「グッドティーチャー参観」
- ・ シラバス表現や、成績評価のあり方について学ぶ「授業デザインⅡ」
- ・ 授業方法を振り返り、改善へと繋げていく「授業改善・秋」
- ・ 領域横断授業の開発を行う「授業デザインⅢ」

（以上、「FD 活動報告書 2022³⁸」より）

* 「ウェルカム研修」は、「FD 研修のてびき 2022³⁹」では、SD 研修に含まれている。「FD 研修のてびき 2022」では、「FD 研修」と「SD 研修」を以下の通り定義づけている。

FD 研修：授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究

SD 研修：FD 以外の、教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図る点の研修

舞台芸術学科では、各専任教員の自主性を尊重し、自身が必要と思う FD/SD 研修に参加するように促している。しかしながら、本学科では各研修につき少なくとも 1 名以上の専任教員が参加することを義務付けていることから、学科長による指名で参加する場合もある。（専任教員が参加できない場合には、事務担当等の職員の参加を義務化している）。研修後には、学科会議において研修内容と研修での学びを共有している。

学科専任教員の FD/SD 研修参加状況は以下の通りとなっている。

2022 年度 FD 研修参加状況

教員名	平井	大久保	小野	宇野	堀田	岡田	大津	梅園
職位	教授	教授	専任 講師	専任 講師	専任 講師	専任 講師	専任 講師	専任 講師
FD 研修出席回数	7	6	5	1	4	12	1	3
ウェルカム研修			1			1		1
進路支援虎の巻						1		
カリキュラムマネジメント I		1				1		1
カリキュラムマネジメント II	1							
コーチング		1				1		
授業デザイン III						1		
グッドティーチャー参観		1		1	1			
障がい学生対応研修						1		
留学生、交換留学生の受入れ支援		1			1	1		
2022 知財セミナー（産学公連携）	1							
体験授業共有会		1	1			1		
授業デザイン I							1	
授業デザイン II								
授業カイゼン・秋	1		1					
救命講習								
「学生の自死・自殺対策に関する研修」	1	1	1		1	1		
ハラスメント防止のための研修	1				1	1		
ルーブリック研修（芸工大合同研修）	1					1		
情報セキュリティ教育 e-ラーニング						1		1
IR 研修	1							
授業カイゼン・春			1					

さらに、「学科独自の FD」と名付けて行っているわけではないが他の教員の授業を定期的に参観することを推奨している。特に次の2項目の参観を推奨している。

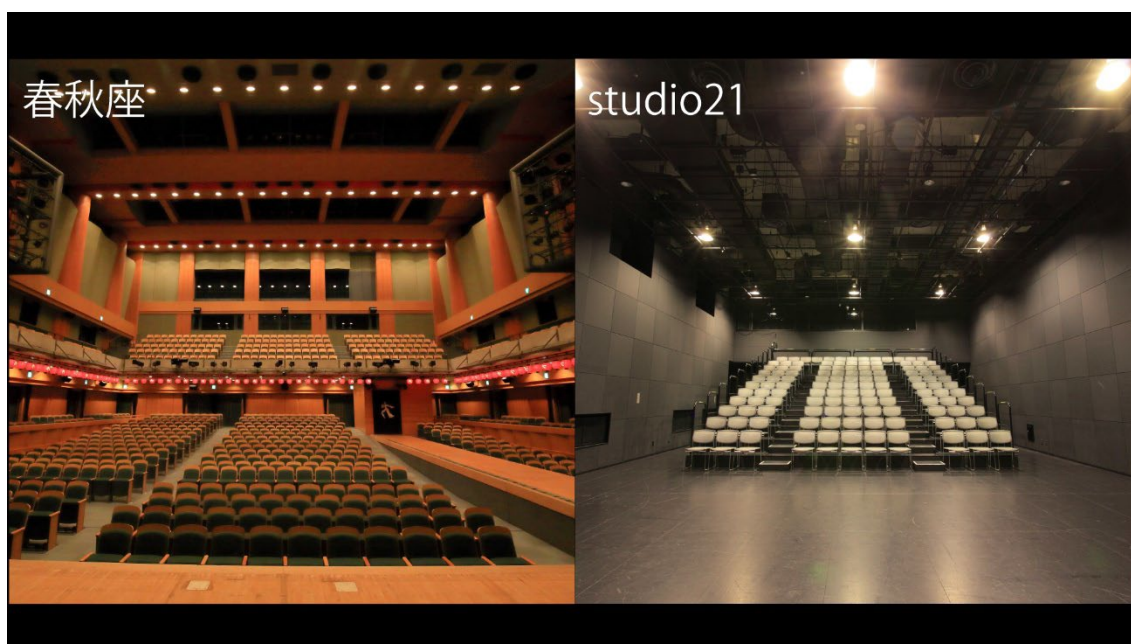
- ①講義科目と演習科目の効果的な連携をねらい、講義科目担当の教員が演習科目を参観する／演習科目担当の教員が講義科目を参観する

②初年次教育と2年次以上の教育との効果的な接続をねらい、初年次教育担当の教員が上級生科目を参観する／上級生科目担当の教員が初年次授業を参観する

このほか、2コースともに、不定期ではあるが月に1回程度、ベテラン教員と若手教員が集まり、教授法の確認や具体的指導法などの共有を行っている。

③ 教育研究活動を行う環境や条件

舞台芸術学科は、「国内最高レベルの劇場が教室。⁴⁰」を学科魅力(特色)の一つとし、本学「舞台芸術研究センター」が管理・運営している京都芸術劇場 春秋座、studio21を日常的な授業を行う教室として、また授業発表公演、卒業制作公演を行う劇場として使用している。2022年度からは、本学科と「舞台芸術研究センター」のさらなる教育・研究連携を図り、舞台芸術学科学科長が「舞台芸術研究センター」副所長を兼任している。



特に studio21 は、授業のほかに自主企画公演(Ⅲ3-④で詳述)等の正課外活動でも使用することから、舞台芸術学科は学生が studio21 と機材等付帯設備を使用する際の運営と安全管理の責任を担っている。学生が劇場と付帯設備を安全に、また適切に使用できるようにライセンス制度(Ⅲ3-④で詳述)を設け、本学科はライセンス講習の実施と管理・運用を担っている。なお、ライセンス講習は授業内で教員の指導のもと実施され、管理・運用には、副手(1名配置)、技官(2名配置)が中心となって当たっている。付帯設備(studio21 備品)リストは、「studio21 ハンドブック⁴¹」を参照のこと。

本学科は、劇場付帯設備以外に学科専用の機材等設備を整備している。これらの使用は、ライセンス取得を条件としていないことから、比較的自由に使用できる機材として特に1、2年生の技術向上に役立てられている。なお、これらは副手と技官が中心となって管理、運用されている。学科所有の機材等設備リストは以下の通り。

舞台芸術学科機材リスト（春秋座・studio21を除く）

調光卓	CX-803A	Lite-Puter	1	CX-803A用電源アダプター×1
	CX-1204	Lite-Puter	1	CX-1204用電源アダプター×1 ※2018.10購入
	SCENESETTER	ELATION	1	2019.5購入
調光器(ディマー)	DX-401A	Lite-Puter	5	電源ケーブル×2を箱に付属
パーライト	OPTI PAR ETL	American DJ	6	500w/シート枠入り※ブルー系のカラー燃えやすい
	par spot medium		4	500w/シート枠入り/替え玉あり
	par spot narrow		4	500w/シート枠入り/替え玉あり
LEDライト	MEGA BAR 50RGB RC	American DJ	2	
	PUNCH LED PRO	American DJ	1	
	ePAR64 RGBA	STAGE EVOLUTION	3	
	photon 80	NITEC	3	※2017購入
	Hex-Par 12	NITEC	5	
	TVL_CYC_RGB	ELATION	1	
	E3WASH	EK-PRO	1	
DMXスプリッター	DMX BRANCH/4	ELATION	1	
	SDS2	STAGE EVOLUTION	1	
フォグマシン	Z-350FAZER	ANTARI	1	
ミラーボール		American DJ	1	40cm
ミラーボール用モーター	MB DMX II	American DJ	1	
インターフェース	DoctorMX		1	
イルミネーション	シャンパンゴールド		3	コントローラー付き100球 100V/120VAC
	パープル		4	コントローラー付き100球 100V/120VAC
クリップライト	E26レフランプ	オーム電機	7	100w球入り
ソケット			2	球なし
	Cソケット		1	
手元灯	e-Ray 12	J&R	2	電源あり
	Kensington		1	USB給電
ハンガー	アルミ		21	
	鉄		5	
ワイヤー			16	シルバー
スタンド			2	
DMXケーブル 3ピン	1.5m		5	
	3m		9	
	6m		4	
	9m		3	
	11m		4	
	15m		9	
	30m		1	
DMXケーブル 5ピン	20m		1	
	15m		4	
DMX変換ケーブル	5ピンオス→3ピンメス 変換		2	
DMX3p→5p変換			4	
DMX5p→3p変換			4	
ワイヤレスDMX[Cセット]	送信		1	送信機(3ピン) 電源アダプタ付き ※3-5.5-3変換各1あり
	受信		3	受信機(3ピン) 電源アダプタ付き
ワイヤレスDMX★[A,Bセット]	wirelessDMX512Transmitter	Bermunavy	1	送信機(3ピン) 電源アダプタ付き ※3-5.5-3変換各1あり
	wirelessDMX512Receiver	Bermunavy	3	受信機(3ピン) 電源アダプタ付き
ターミネーター	DMT-414		10	2020.6に6本購入
Cメス→平オス変換ケーブル	20A	2016.2作成	9	
Cオス→平メス変換ケーブル	20A	2017.03作成	10	

電源ドラム	NP-E34 30m	日動工業株式会社	1	巻いたままで500wまで、引き延ばして1500wまで/アース付き
	N-30 30m	日動工業株式会社	3	巻いたままで400wまで、引き延ばして1500wまで
電源ケーブル 平行	黒 10m 3口		16	丸形・15A 4本・12A 12本(12A1本をNB201で使用 2023.6現在)
	黒 20m 1口		3	
	黒 10m 3口		25	丸形
	黒 20m 3口		3	
	黒 2m 8口		1	内4口はアース付き
	黒 3m 3口		2	
	黒 6m 1口		2	
	黒 5m 1口		1	
	黒 3m 1口		1	
	黒 2m 6口		1	
	黒 3m 1口		1	スイッチ付き
	白 5m 7口		2	
	白 3m 3口		1	
	白 2m 8口		1	
	白 1m 3口		2	
	白 2m 3口		1	
	白 1m 1口		1	
白 3m 1口		2		
白 2m 1口		5		
OAタップ	白 3口		2	
	黒 3口		4	
ライトコントローラ	PC-31	太洋電機産業株式会社	5	MAXIMUM:200w
ダボ			4	
アース変換3p-2p			19	
サーキュレーター	黒 PLF-HM23	アイリスオーヤマ	1	
ブラックラップ			7	
キャスター付きスタンド			2	
LAN分配器	LAN-SW05/PH	Logitec	1	5ポートスイッチングハブ
	LSW4-TX-5EPL/BKD	Buffalo	1	5ポートスイッチングハブ
	EHC-F05PA-W	ELECOM	1	スイッチングハブ

その他に本学科は、以下の教室・施設を管理し、教育研究に使用している。

NB201：演技、ダンス、歌唱など身体表現の演習授業の教室として使用しているほか、各発表公演の稽古場として使用。春秋座の舞台間口に対応した広さを確保している。

Y 3 1：演技、ダンス、歌唱など身体表現の演習授業の教室として使用しているほか、各発表公演の稽古場として使用。照明機材を吊れるシーリング・パイプと暗転設備を備えていることから自主企画公演等の劇場としても使用している。

楽心荘：学内の屋外能楽堂に併設された教室。日本舞踊の演習授業に使用しているほか、各発表公演の稽古場として使用。

Y 3 2：グループワークと PC 使用が可能な教室。主に舞台デザインコースが使用している。

衣装製作室：研究室内に併設された部屋で衣装の製作と管理（保管）に使用している。

工具室：研究室が管理する工具が保管されており、隣接スペースでは、舞台装置などを製作している。

これらの教室・施設は、学科の授業での使用のほか、本学「芸術教養センター」(Ⅲ-2-②で詳述)が開講する「伝統文化演習⁴²⁾」等の授業の教室として貸出している。また、これらの教室・施設が正課授業で使用されていない日や時間帯は、学生の自主稽古や自主製作、自主企画公演の稽古場、工房として貸し出している。学生への貸し出しについては、副手や技官が統括している「稽古場会議」、「衣裳委員会」(いずれも月1回開催)、「4か月委員会」(工具室利用のため年3回開催)において管理、運用されている。

上記の教室・施設のほかに、研究室に隣接するスペースを学生が自由に使えるように開放している。このスペースは、学生が休憩やオンライン授業の受講に使用しているほか、協働の過程として必須である「話し合い」、「打合せ」を行う場、また教員と学生が気軽に語らう場として機能している。

〈ウルトラファクトリーの活用〉

金属加工・樹脂成型・木工加工ができる全学共通工房「ウルトラファクトリー」に関しては、本学科の学生の活用はほとんど見られない。これは、舞台創造に必要な製作活動が学科内の施設や設備で概ね成立するためだと考えられる。

〈図書館の活用〉

図書館の活用方法は、入学時のラーニングリテラシーの中で紹介している。本学科では、自学自習(予習・復習)のために図書館の利用を促している教員も多い。本学科学生の図書館入館者数、貸出冊数の推移は以下の通り。

		2019	2020	2021	2022
入館者数	1年生	1554	361	324	408
	2年生	859	312	569	201
	3年生	664	181	553	565
	4年生	504	143	406	404
	合計	3581	997	1852	1578
貸出冊数	1年生	308	268	124	116
	2年生	413	107	152	67
	3年生	287	153	167	232
	4年生	183	141	249	125
	合計	1191	669	692	540

④ 自己評価

舞台芸術学科の専任教員、特に演習系の授業を担当する教員は、大学での教育活動に加えて、業界を支えるプロフェッショナルな舞台人や俳優として活動している。これは、専門的教育課程の運営において強味となり得る一方で、専任教員に求められている職務が「教育」だけでなく「学生支援」「大学運営」など多岐に及ぶことから、弱点ともなり得る。しかし、本学科は「教員業績評価」に加味される2022年度「学科等単位評価⁴³」において、全学科の中で最高評価を取めた。この結果から、本学科では専任教員が適切に確保・配置され、各々の教員が求められている役割を十分に果たしていると考える。今後は、さらなる専門教育課程の充実を目指し、現在は専任教員を配置できていない「舞台照明」領域と「演出」領域の充足が課題である。

本学科は、「客員教授」「非常勤講師」の担当コマ数の比率が高いことも課題である。これは、舞台芸術の業界の特色として、制作拠点が東京近郊に一極化されており、専任教員となり得る関西在住の専門家が極端に少ない状況が背景にある。業界の状況や状態を変えることは不可能だが、本学科の専任教員は、即時の教員採用の必要性に限らず、専任教員候補となり得る人材の確保を重要な任務としている。

本学科は、プロ仕様の2つの劇場を教室として使用できる恵まれた学修環境が整備されている一方で、舞台美術（装置）を製作する工房がないことが長年の課題となっている。また、2024年度の改組に向けて、学生が自学自習できる教室（稽古場）が十分に確保されていないことも課題である。

舞台芸術の製作現場においては危険を伴う作業が多く含まれるが、本学科は2007年度の学科創設以来、重大な事故なく今日に至っている。このことから、現在使用している施設・設備は、適切に管理・運営されていると考える。

2 体系的カリキュラム

① DPとカリキュラムとの連関（教育目標との整合性、スコープ）

「教育目標」を起点として策定された本学学士課程のDPは、「人間力」と「創造力」を構成する以下の「7つの能力」から成っている。

「人間力」

- ・ 知識：人間、社会、自然等に関する知識・情報を体系的に収集・理解できる。
- ・ 思考力：正しい情報をもとに、物事を論理的に考えることができる。
- ・ 行動力：設定した課題に対し、自らを律しながら他者と共に粘り強く継続的に取り組むことができる。
- ・ 倫理観：自らの良心に従い、社会のために芸術・デザイン力を生かすことができる。

「創造力」

- ・ 発想力：豊かな感性から直観を、概念・イメージなどにまとめることができる。
 - ・ 構想力：概念・イメージなどを紡ぎ合わせ、テーマ・仮説として練り上げることができる。
 - ・ 表現力：テーマ・仮説などを様々な媒体によって可視化し提案することができる。
- (以上、「ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）⁴⁴」引用)

大学が策定した上記 DP を舞台芸術学科の専門性に即して適用し再表現した「学科 DP」は以下の通りである。

「人間力」

- ・ 知識—【理論】：舞台芸術概論から作品研究までの理論を通じ、舞台芸術の歴史や多様性、社会的展望を体系的知識として理解し、かつ、その理論をベースとした演習に展開するための方法論を修得する。
- ・ 思考力—【問題意識】：表現（舞台創作）に至るまでのプロセス、または準備として、自ら問題意識を持ち、その問いに対する答えを主体的に導き出す力を修得する。
- ・ 行動力—【遂行】：他者と協働し舞台作品を創作する過程において、自らの役割を主体的に選択し、担った役割の目的を理解し、遂行していく力を修得する。
- ・ 倫理観—【客観性】：舞台芸術は、観客（社会）と時間／空間を共有する芸術であることを認識し、客観的視点を持って創作作品と社会との関係性、または社会における位置づけをはかることで、社会をより良い方向へ導く作品を創作する力を修得する。

「創造力」

- ・ 発想力—【主体性】：表現（舞台創作）に至るまでのプロセス、または準備として、自らの思考や経験を基に新たな価値観を見出し、主体的かつ独創性あるデザインや役づくり、演出の在り方を修得すること。
- ・ 構想力—【協働】：協働を原則とする舞台創作の中で、一つの目標に向かって（作品創作に向かって）自らの思考や発想を他者のそれらと関連付け、組み合わせていく力を修得する。また、時間的計画性をもって他者と協働する力を修得する。
- ・ 表現力—【貢献】：自らが選択した役割を果たすために必要とされる技術や能力を総動員し、より優れた作品創作または舞台上演に貢献できる力を修得する。

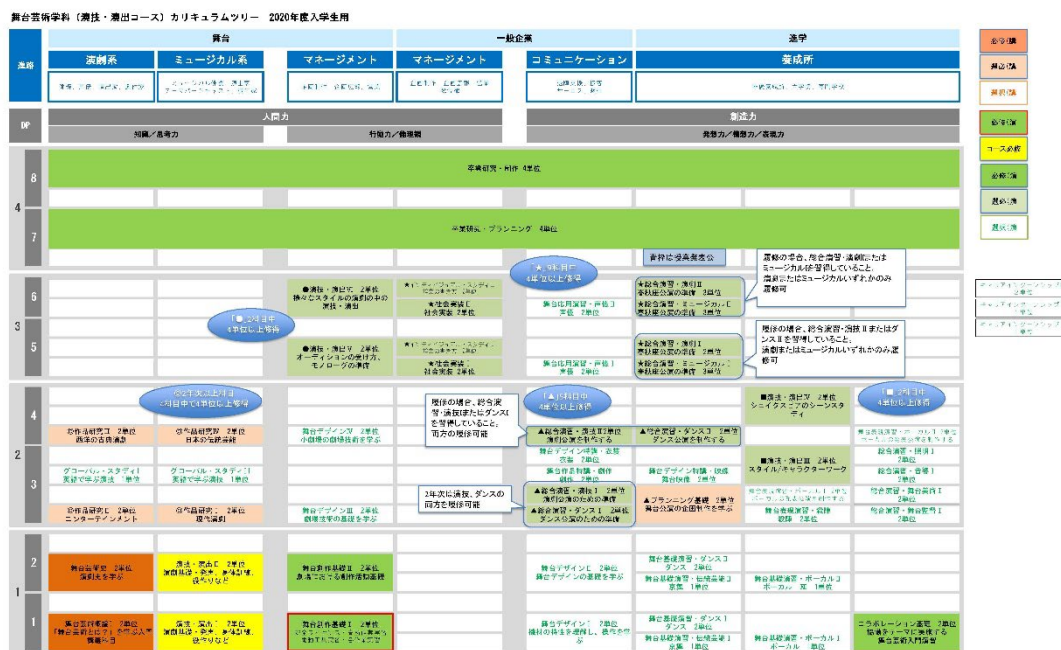
本学科のカリキュラムは DP を構成する 7 つの能力と関連し、また、各科目の「到達目標」は DP と関連している。以下、「カリキュラム・マップ⁴⁵」を使って具体的に DP とカリキュラムの整合性を説明する。

令和4(2022)年度 自己点検・評価報告書
舞台芸術学科

科目名	必修/選択	履修年次	履修学期	履修単位数	ナンバリング	開講時期	到達目標												
							知識	理解	応用	表現	実践	創造	評価	協働					
舞台創作基礎I	必修	1	演習	2	28EM1503	前期	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
舞台創作基礎II	必修	2-3-4	演習	2	28EM2204	後期	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

マップでは、左端より「科目名」、「必修/選択必修/選択」、「講義/演習」、「履修年次」、「開講期」が並記され、その次に当該科目で修得できる力を◎、○で表示している。さらには、「テーマ」、「授業概要」、「到達目標」が並記され、「到達目標」とDPの連関を確認できるように表記されている。例えば、1年次必修の演習科目「舞台創作基礎I」は、特に重要な力を「行動力」とし、次に重要な力として「構想力」、「表現力」を加えている。舞台芸術の創造に向けた最も基礎的な力を身につけるための2コース合同科目である当該科目の「到達目標」の一つは、「在籍するコースの枠組みを越えて、春秋座、また studio21 で安全に作業することができる。工具や機材の安全な使い方を身につけることで、構想したデザインを製作することができる」とあり、「行動力」、「構想力」、「表現力」と関連している。またもう一つの「到達目標」には、「詩や短編小説などをモチーフとした短い劇をグループで創作し、舞台化することができる」とあり、やはり「行動力」、「構想力」、「表現力」と関連している。

なお、本学科では、「科目分類」と4年間のシーケンスを表した以下の「カリキュラム・ツリー⁴⁶」と合わせて各年度の学科ガイダンスの際に配布している。



舞台芸術学科演技・演出コースカリキュラムツリー

本学の学生は、「各学科における7つの能力⁴⁷⁾」の学修成果を「DPA (DP達成度評価)⁴⁸⁾」を使用して確認することができる。「DPA」には、学生が履修登録や成績、出席確認をするLMS(学修管理システム)「manaBe」(マナビィ)からログインできる。

「DPA」では、自身のカリキュラムが表示され、「各授業は、本学のディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)に定められた「7つの能力」のうち、主に紐づく能力1~3か所に表示⁴⁹⁾」されることで、7つの能力のうち、どの力が修得できる科目を履修しているのか確認することができる。さらに、成績開示後には、DPの累積達成度がレーダーチャートによって7つの能力別に表示される⁵⁰⁾。DPの達成度は、各学科の専門科目だけでなく芸術教養科目についても確認できるほか、専門科目/芸術教養科目の7つの能力別GPA・GPTも確認できる⁵¹⁾。

本学科では、学生にDPを意識させ、7つの能力をバランスよく修得させるために、1年次必修科目「コラボレーション基礎」の授業内で「DPA(DP達成度評価)活用マニュアル」を参照しながら活用方法のレクチャーを実施している。また、担当教員による定期面談では、各学生のDPAを参照し、DPの達成度を確認している。

② CPとカリキュラムとの連関(順次性・系統性/シーケンス)

本学学士課程(通学課程)のCPは、以下の通りとし、本学ホームページ在校生ページ⁵²⁾において公表されている。

京都芸術大学芸術学部(通学課程)のカリキュラムは、ディプロマ・ポリシーに掲げる「人間力」と「創造力」、それらを構成する7つの能力を、段階的・体系的に身につけることを方針とし、芸術・デザインを学ぶ上で必然であるPBL(Project-Based Learning)型演習に加え、社会連携による実践的な教育プログラムの充実を特色としています。カリキュラムは、「芸術教養科目」と「学科専門科目」を2本の柱としており、それらを構成する各科目の編成方針・内容は次のとおりです。

1. 初年次教育は、学部全学科の混成クラスにより、多様な学生がともに本学で学ぶ意義・目的について考え共有することで、学習意欲の形成と主体的な学習のための下地を作ります。「クリエイティブワークショップ」、「ことばとコミュニケーション」、「デッサン演習入門・基礎」、「リサーチ&リテラシー入門」等、多様な科目が開講され、それぞれの学生の自主的な選択により、主体的な学びへの導入を行います。

2. 芸術教養科目は、初年次教育に含まれる科目に加え、基本的リテラシーを修得する「創造基礎科目群」、これからの学習に必要となる教養や基礎力を身につける「芸術教養科目群」、日本文化の深い精神性を体験する「日本文化科目群」で構成されま

す。芸術教養科目群には、各学科の特徴ある専門講義が他学科開放科目として開講され、自身の学科・専門領域を越えて幅広く学ぶことができます。

3. 学科専門科目は、専門的知識と基本技能の修得を目的とした講義と演習による基礎課程と、より実践的な演習を中心とした応用課程によって構成され、特に応用課程では、各学科の独自性を生かしながら、実社会との関わりを意識させる、社会実装演習を常態化することで、学生の能動的取組み姿勢とアウトプットを高いレベルで引き出す教育を行います。

4. 進路教育は、クリエイティブな資質を身につけた人材を世の中に送り出すことで、社会の変革を目指す「芸術立国」を理念とする本学にとって重要な柱です。入学時のガイダンスから、1・2年次のキャリア研究基礎・実践、3年次の実践的対策特講等の正課授業に加え、年間を通して行われる担当教員との面談、3年次からの各種キャリア支援講座まで、一連のプログラムとして有機的に構成されています。このプログラムを通して、本学で学んだ芸術・デザインの知識と技能を、学生自らの人生と社会のためにどう生かすかについてきめ細かく指導します。

5. 成績評価は、それぞれの授業への2/3以上の出席を要件として、「筆記試験」、「レポート課題」、「提出作品」、「授業で発揮されたパフォーマンス」等を評価の対象として、全学共通の「成績評価に関するガイドライン」に基づき厳格に行います。また、修得単位の数だけではなく、質を表す指標としてGPA（Grade Point Average）を活用し、学修成果を多面的に評価します。

舞台芸術学科では本学CPに則り、以下の通り、カリキュラムが順次性・系統性をもって編成されている。

■ 初年次教育

【1年次：基礎】

初年次教育として以下の科目を2コース合同の必修科目とし、舞台人として不可欠な「人間力」、「創造力」の基礎力修得を目標としている。（下記網掛部分は、1年次の最重要テーマと位置付けている内容。）

・**コラボレーション基礎**：前半は、学科で修学するために必要なリテラシーを学び、後半は、舞台人として不可欠な「協働」を学ぶためのワークショップを実施している。演習科目。

・**舞台創作基礎Ⅰ**（前期）、**舞台創作基礎Ⅱ**（後期）：前期科目は、舞台上での作業に不可欠な「安全」に関することを学ぶ。当該科目を修得すると「安全ライセンス（入門ライセンス）⁵³」が取得できる。また、当該科目の単位修得を進級要件としている。後期は、京都芸術劇場 studio21 における小作品の発表を目標とし、創作プロセスを通して実際の舞台人の協働を学ぶ。演習科目。

・**舞台芸術概論Ⅰ**：舞台芸術の諸相を学ぶとともに、そもそも「舞台芸術とは何か？」を問う。今後の舞台創作・研究の起点と位置付けている講義科目。

・**舞台芸術史**：舞台芸術の歴史を紐解くことを通して、現代を生きる我々がどのような舞台芸術を創造していくべきかを問う講義科目。

このほかに、**コース必修**として各コースの基礎を学ぶ演習科目が、前期・後期に編成されている。これらのコース必修科目は、一方のコースに在籍する学生は選択科目として履修することが可能となっている。

■ 応用・発展

【2年次：応用】

2コース合同で行う京都芸術劇場 studio21 における演劇発表公演（選択必修）とダンス発表公演（選択必修）の実施を主たる目標として、「人間力」、「創造力」を修得する。（下記網掛部分は、各コースの2年次最重要テーマと位置付けている内容。）

〈演技・演出コース〉以下すべて演習科目。

・**演技・演出Ⅰ**、**演技・演出Ⅱ**（選択必修）において、現代演劇、古典演劇などスタイルの異なる演技を体験することで、演技表現の可能性を広げていく。

〈舞台デザインコース〉以下すべて演習科目。

・1年次においては、コース必修科目の中で「照明」「音響」「舞台美術」「舞台監督」などすべての領域を学ぶが、2年次からは、領域毎の授業（選択必修）が編成されている。

・授業発表公演（後期・選択必修）では、学生は自身の専門としたい一領域を選択し、履修する。

このほか、2コース合同の講義科目（選択必修）として「現代演劇」、「西洋古典演劇」、「日本伝統芸能」、「エンターテインメント」をテーマとした授業を開講している。

【3年次：発展】

2コース合同で行う京都芸術劇場 春秋座における演劇発表公演（選択必修）／ミュージカル発表公演（選択必修）の実施を主たる目標として、「人間力」、「創造力」を修得する。（下記網掛部分は、各コースの3年次最重要テーマと位置付けている内容。）

〈演技・演出コース〉以下すべて演習科目。

- ・演劇発表公演、もしくはミュージカル発表公演のいずれかを選択する。
- ・**演技・演出V**：演技・演出コース生としての一般就職のあり方を「仮想面接」などのロールプレイを通して学ぶ。また、オーディション演習を通してプロの俳優になることを探る。就活準備科目として位置付けている。
- ・**演技・演出VI**：卒業制作公演準備科目と位置付け、演出家または俳優として主体的にリサーチや戯曲分析を進めていくことを学ぶ。

〈舞台デザインコース〉以下すべて演習科目。

- ・春秋座公演のデザイナー、プランナー、スタッフとして自らが選んだ領域の技能を深めていく。
- ・**舞台デザインV**：専門分野の企業研究などを通して、夏休みのインターンシップを実現化させる。就活準備科目として位置付けている。
- ・**舞台デザインVI**：卒業制作準備科目と位置付け、舞台スタッフとしての主体的にリサーチ、戯曲分析、構想を進めていくことを学ぶ。

このほかに、2コース合同科目として舞台芸術に関する研究論文を執筆するインディビジュアル・スタディⅠ、Ⅱ（選択必修）を開講している。卒業研究において論文執筆を希望する場合には、これらの科目の履修を義務付けている。

【4年次：発展／統合】

本学科では、「卒業研究」として「卒業制作公演」または「研究論文」／「戯曲」のいずれかを成果物とすることを課している。

・**卒業制作公演**：企画から上演までのすべてのプロセスを学生が主体的に展開させる。具体的プロセスは以下の通り。以下、斜体部分は教員による評価基準を記述。

①企画・演出希望者は、自身が演出したい戯曲を選択し（書下ろし作品も可）、企画概要や企画意図（演出意図）を「企画書」としてまとめて提出する。→*学科DPと照らし合せ、「本学科の卒業制作公演として適切な戯曲を選択しているか」、また「実現可能な企画意図が表現できているか」等を評価基準として企画の合否を判断する。（専任教員全員で評価）*

②公演に参加を希望する学生は、審査を通過した企画の「企画書」を読み、各自どの企画にどの役職で参加するのかを決めて申し出る。

③上演場所、公演期間、予算などを決め、稽古や各スタッフに課せられた製作を進める。→領域ごとに、学科DP、ループリックに示された評価基準と照らし合せ、製作段階に応じた指導を実施。

④公演実施後は、専任教員と各公演に参加した全員が集まり合評を実施。→領域ごとに、学科DP、ループリックに示された評価基準と照らし合せて講評を実施。

・個人企画：舞台芸術に関連する研究論文、または戯曲の執筆。上記の合評には、個人企画を選択した学生も参加し、講評を実施している。

■ 芸術教養科目

本学では、芸術教養センターによって芸術教養科目が開講されている。学生は、原則的に1週間の中で月、火曜日に芸術教養科目を、水、木、金曜日に学科専門科目を履修している。芸術教養科目は、「創造基礎科目群」（卒業要件として3単位以上修得）、「芸術教養科目群」、「日本文化科目群」に分類されているほか、「リアルワークプロジェクト」、「ウルトラプロジェクト」から成る「プロジェクト演習科目」やキャリアデザインセンターと連携した「就職支援授業」も開講されている。

「総合芸術」である舞台芸術は、多種多様な知識や体験を必要とするため、学科ガイダンスでは、「舞台芸術」と「教養科目」との連関を強調している。特に本学科の教育目標や教育内容と関連がある以下の科目は履修を推奨している。

- ・「クリエイティブワークショップⅠ」「クリエイティブワークショップⅡ」→協働を学ぶため
- ・「ことばとコミュニケーションⅠ」「ことばとコミュニケーションⅡ」→演劇は原則的に言葉を媒体とした芸術であるため
- ・「日本芸能史Ⅰ」「日本芸能史Ⅱ」→本学科「舞台芸術史」の上位科目と位置付けている
- ・「伝統文化演習」→演技・演出コース生には、俳優の素養として必要であるため

このほかの芸術教養科目については、履修面談の際に各学生の志向に沿って推奨科目を示している。

また、「就職支援授業」の中の「就職対策特講」は、原則的に学科全学生の履修を義務付けている。

■ キャリア教育

舞台芸術学科では、以下の科目をキャリア関連科目と位置付けて体系的なキャリア教育を展開している。

【1年次】2コース合同

コラボレーション基礎 前期科目（必修）：前述通り主たるテーマは「ラーニングリテラシー」と「舞台芸術の創造に不可欠な協働」としているが、授業計画に「ロールモデル研究」を組み込み実施している。この授業前半は、本学科の進路パターンや実際の進路傾向、就職率などを説明し、後半は、既に進路が決定している4年生を「ロールモデル」として招き、質疑応答の時間を設けている。進路を考える糸口と位置付けている授業。

【2年次】2コース合同

プランニング基礎 前期科目（選択必修）：舞台公演を実施する際の企画・制作業務を学ぶことを主たるテーマとしているが、演劇プロデューサーを招いての「業界研究」や「企画書」の執筆等を通して、社会に出るための意識付けや汎用能力を修得させている。選択必修ではあるが、2年次生全員に履修を推奨している。

「プランニング基礎」成績評価分布

	S	A	B	C	D	F
2021	6.67	22.22	57.78	6.67	6.67	0
2022	3.45	13.79	72.41	3.45	1.72	5.17

「プランニング基礎」履修者推移

	2年次 履修者	2年次 在籍者数
2021	45	54
2022	57	58

【3年次】

〈演技・演出コース〉

演技・演出V：演技・演出コース生としての一般就職のあり方を「仮想面接」などのロールプレイを通して学ぶほか、オーディション演習を通してプロの俳優になることを探る。また、(株)ホリプロ、四季(株)(劇団四季)の人事担当者や制作担当者を招き、マネージャーや制作者として「就職」する場合と「俳優として所属」する場合とに分けて説明を受けている。また、「自己PR」や「プロフィール」の作成についても指導を受けている。

舞台デザインV：業界研究や本学科と提携している劇団四季の劇場バックステージツアー実施を通して、主に専門就職に向けての就活について学ぶ。専門企業へのインターンシップに向けたコーディネーションもこの授業の中で実施している。

■社会実装教育の実施

舞台芸術学科では、以下の科目を社会実装科目（産学公連携科目）と位置付けている。

【2年次】

プランニング基礎：前述通りキャリア科目としての役割もある。この授業では、京都芸術劇場 春秋座での観客案内、観客対応の実践的実習を含むほか、業界企業の関係者⁵⁴を招聘し、学生からの実際的な企画提案等を受け付けている。

当該科目は、3年次「社会実装Ⅰ、Ⅱ」への接続科目と位置付けている。

【3年次】

社会実装Ⅰ（前期）、社会実装Ⅱ（後期）：京都芸術劇場 春秋座公演の広報業務を担当する。以下、2022年度実績

- マームとジプシー『cocoon』 関連イベント制作、広報用ポップ制作
- 森山開次『LIVE BONE in 春秋座』 広報用ポップ制作
- 『京舞と狂言』 広報助手
- Kyoto Experiment 広報助手
- 鼓童『ワン・アース・ワン・ツアー〜ミチカケ』 広報助手

本学科では、正課外においても「舞台芸術学科・社会実装プロジェクト」として本学科専任教員の指導のもと、多数のプロジェクトを実施している。以下、2022年度実績

- (株)RS VTuber 声優プロジェクト
- 京都市消防局 女性消防士募集アニメーション声優プロジェクト
- 京都府警 警務課被害者等支援室 訓練 *京都府警より「感謝状」拝領
- NHK「うたコン」橋幸夫・歌手引退記念（2023年3月放映） 振付、出演
- 猿之助と愉快的仲間たち『ナミダドロップス』@春秋座 衣装デザイン、衣装製作、出演



2022年10月に行われた被災者支援訓練の様子。



日本DMORTと舞台芸術学科の学生。



NHK「うたコン」橋幸夫・歌手引退記念（2023年3月放映）

③ 教育研究目的（学術分野）に対する教育内容・水準の適切性

日本の大学等高等教育機関における「舞台芸術」または「演劇」、特にそれらの実践的教育は、比較的新しい学術分野である。国内では、実践的な舞台芸術または演劇教育課程を有した機関として、1950年に日本大学藝術学部演劇科が、1966年に桐朋学園芸術短期大学芸術科演技専攻が、1974年には大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科が設立されている。その後、1990年から2000年にかけて、多摩美術大学、桜美林大学などが舞台芸術、演劇関連学科を増設している。本学科も2000年に設立された本学「映像・舞台芸術学科」を前身としていることは、既述の通りである。従って、学術分野として、いまだ「定義づけ」や「設置基準」、「評価基準」等が明確化されていない。当然のことながら、日本学術会議が提言している「大学教育の分野別参照基準」にも「舞台芸術」またはそれに隣接する学術分野は見当たらない。

こうした状況の中で、本学科演技・演出コースは2007年の学科設立以来、学術分野として信頼性のある欧米、特に米国の実践的芸術学位BFAの舞台芸術プログラムの課程を参照し、体系的カリキュラムを編成してきた。以下、本学科がBFAプログラムを参照し導入している内容である。

（演技プログラム）

- ・「演技」、「身体表現」、「発声・スピーチ」から成り、各々、基礎から発展まで体系的に編成すること。
- ・「演技」は、「具体的演技方法論*に則した心身の基礎トレーニング」、「具体的演技方法論*に則した戯曲の解釈法」、「シーン・スタディ」から成り、各々基礎から発展まで体系的に編成すること
- ・リアリズム演劇を基礎として古典演劇（特にシェイクスピア演劇）、コメディ等、いくつかの演劇スタイルへと発展させること

・「舞台芸術史（演劇史）」を含む「作品研究」等講義科目を導入すること、「作品研究」は、その内容を演習内容と関連させること

*本学科では、スタニスラフスキー・システム、ビューポイントなどの演技理論を導入している。

本学科舞台デザインコースに関しては、四季（株）（劇団四季）と提携し、学科独自のインターンシップを通して学生の技能水準等の評価を受けている。また、授業発表公演に制作担当者や技術担当者を招聘し、公演における技能、芸術的水準のアセスメントを受けている。

さらには、国際基準と照合し、教育の質の向上と担保を図るため、本学科は2019年度より Asia Pacific Bond for Theater Schools (以下、APB と記述)に加盟した。UNESCO-ITI と提携した APB には、アジア、オーストラリアの舞台芸術、演劇系学科を有する大学が加盟している。加盟は原則的に1か国1大学とされ、APB 理事より推薦を受けた大学の代表者が APB 理事会において所属大学の教育活動や教育成果をプレゼンテーションした後、同理事会の審査を経て承認される。本学科は既に加盟していた桐朋学園短期大学に加えて特例的に加盟が承認された。主な加盟校は以下の通り、QS や THE 等の大学ランキングにおいて国際的評価の高い高等教育機関が名を連ねている。

オーストラリア：メルボルン大学

中国：上海戯劇学院

韓国：韓国芸術総合学校

台湾：国立台北芸術大学

シンガポール：ラサール芸術大学

インドネシア：ジョグジャカルタ芸術大学

タイ：チュラロンコン大学

フィリピン：アテネオ大学

APB は、毎年1回、Directors' Meeting が開催され、各大学の教育活動、教育成果等が共有されている。また、各大学教員による授業も開講され⁵⁵、授業に対する評価も話し合われる。さらには、学生演劇祭も開催され、教育成果の評価の場でもあり同時に、アジア、オーストラリアで舞台芸術を学ぶ学生たちの国際交流の場にもなっている⁵⁶。

④ 自己評価

①本文中において、本学科カリキュラム、各科目の到達目標が本学 DP と関連していることを「カリキュラム・マップ」を使い具体的に証明した。さらには、本学科での

「DPA（活用マニュアル）」の活用方法を説明することで、本学科では、専門科目に加えて芸術教科目においてもDPが身に付く仕組みを導入していることを明らかにした。

②本文中において、本学科カリキュラムがCPに則し順次性、系統性を持ったカリキュラムであることを、「初年次教育」から「応用・発展」、「卒業研究」までの流れを各科目のテーマや概要も詳述しながら明らかにした。

さらには、「芸術教養教育」と専門科目との関連についても、具体的な学科奨励科目を挙げることで明らかにした。

「キャリア教育」に関しては、低年次から3年次まで体系的キャリア教育が編成されていることを明らかにした。また、本学科は過去5か年「進路決定率」、「就職決定率」において高水準を維持（IV-2-①で詳述）している。この結果からも、本学科では、適切にキャリア科目が編成され機能していると考えられる。

「社会実装教育」に関しては、「キャリア科目」と接続した「社会実装科目」の実績を挙げることで「社会実装教育」が適切に編成されていることを明らかにした。また、年間多数の「舞台芸術学科・社会実装プロジェクト」を実施し実績を挙げていることを明らかにした。②文中でも記述した通り、京都府警警務課被害者等支援室訓練においては、感謝状を拝領するなど社会的評価を受けているほか、NHK「うたコン」において振付を担当した学生は卒業後、『ハリーポッター 呪いの子』の演出助手として活躍している。これらの実績からも本学科「社会実装教育」は、適切かつ効果的に実施されているものと考えられる。

③本文中において詳述している通り、本学科は、国際基準と照合したカリキュラムを編成しており、その教育水準の妥当性は、国際的機関や国内最大手の企業によって十分に検証、実証されている。よって、本学科の教育研究目的（学術分野）に対する教育内容・水準は、適切だと考える。

3 教育内容・教育方法

① シラバスに基づいた授業の実施

本学『シラバス作成のてびき⁵⁷⁾』には、「シラバスの定義と関連制度」、「シラバスで重視すること」として以下のように記載されている。

シラバスの定義と関連制度

シラバスとは各授業の詳細な授業計画。一般に大学の授業名、各担当者名、講義目的、各階の授業内容、成績評価方法・基準、準備学修などについて具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等が記されており、学生が各授業科目の準備学修をすすめるための基本となるもの。また、学生が講義の履修を決める際の資料となるとともに、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価にも使われる。（文部科学省中央教育審議会 2008）

大学教育の質的転換に向けての改革において、学生の主体的学修を目標年、単位の実質化や成績評価の厳格化が文科省より要請されています。

具体的には、単位の実質化として、授業期間 15 週の確保（大学設置基準 23 条）、1 単位 45 時間の学修を要する教育内容をもって構成すること（同 21 条の 2）成績評価の厳格化として評価の基準をあらかじめ明示し適切に運用することなどが挙げられます。（同 25 条の 2）。

これらの制度内容は、本学が満たすべき前提事項であり、シラバスにおいてお記述内容の基盤となるものであることを確認してください。

シラバスで重視すること

シラバスとは、上記の通り、授業の目的、内容、評価、授業外学修などについて詳細に書かれた授業計画のことです。そこには、授業を学ぼうとする「学生の視点」、教育内容を充実したものとして構築しようとする「教員の視点」、そして教育内容を責任を持って社会へ明示する「大学の視点」の3つが含まれます。これら3つの視点をそれぞれ十分に満たしたシラバスを作成し、公表していくことが重要です。

舞台芸術学科の専任教員は、上記の内容を理解した上で、学科 DP や学科のカリキュラム編成方針に則した各自の担当授業を設計し、シラバスのフォーマットに落とし込んでいく作業を行っている。客員教授、非常勤講師に関しては、学科長もしくは各客員教授、非常勤講師を担当する専任教員とで何度かやり取りを繰り返すことで適切なシラバスを完成させている。また、「シラバス作成のてびき」の要点をまとめて予め各教員に配布しておき、シラバス作成後には、まず各自でシートにある項目が適切に記述、表記できているかの確認を行っている。シラバス提出後は、専任教員全員でピアチェックを行い、不足や誤りがあった場合には、該当科目の教員に連絡し、自身での修正を促している。最後に、学科長がすべてのシラバスを精読し、学科が意図するカリキュラムに則しているかをチェックしている。

本学科では、適切にシラバスが作成され、またシラバスの内容とカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーと整合性が取れていることを証明するために、①シラバスピアチェックシート ②学科カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー ③2022 年度開講科目シラバスを添付する⁵⁸。

② 成績評価

シラバス上の「到達目標」は、カリキュラム・マップにある内容と一致していることを前提としている。従って、本学科の各科目の「到達目標」が「教育目標」、「学科 DP」と整合性が取れていることは、III-2-①で実証している。

■ 評価基準／評価方法

「到達目標」に対し、達成度を評価する具体的な基準となるのが「評価基準」である。『シラバス作成のてびき』では、「京都芸術大学芸術学部 成績評価に関するガイドライン⁵⁹」参照としたうえで、「評価基準」に関して以下のように記述されている。

・出席回数が授業全体の2／3未満の場合、成績評価の対象としない（F：評価対象外）。

※出席回数は成績評価を受けるための要件ではありますが、出席自体を評価対象や評価基準とすることはできません。

・受講者全体の内、Sの割合は全体の10%以下、S+の割合は30%以下になるよう難易度を設定する。

※成績評価時に評価の割合（人数）を調整するのではなく、予め上記の分布になるように授業設計をお願いいたします。

また、『シラバス作成のてびき』では、「評価基準」例として以下のように記述されている。

[良い例]

・○○と××の相違点と類似点を説明できる。

・△△を使って□□できる。

また、「評価基準」に対し、その達成度を測る手段となるのが「評価方法」である。本学シラバスのフォーマットには、「授業態度」、「コメントカード・授業内提出物」、「課題・成果物」、「期末レポート」、「期末筆記試験」の具体的「評価方法」があらかじめ表記されており、教員は「評価方法」として設定するものに「○」を付けるようになっている。『シラバス作成のてびき』では、「可能な限り複数の方法を設定」することを推奨している。さらには、各評価方法の割合を%で表記するようになっている。

以下、本学科科目の「評価基準／評価方法」の例として「舞台芸術概論I」シラバスを抜粋する。

評価方法 ／ 評価基準	授業態度	コメントカード・ 授業内提出物	課題・成果物	期末レポート	期末筆記試験
各自の問題意識の中で舞台芸術の概観を考察し、自分なりに捉えなおし、それを自身の言葉で論述できる。	○	○		○	
現代社会における舞台芸術の意味や意義を自分なりに把握し、自分なりの論点を構築することができる。	○		○	○	
	15 %	20 %	15 %	50 %	
小レポートの提出が1回あります。					

■ ルーブリックによるパフォーマンス評価

本学では、ルーブリックの活用が推奨され、教務（事務局）が教員に向けて『シラバス作成のてびき』とは別にまとめている『ルーブリック作成のてびき⁶⁰』には以下のように記述されている。

教学マネジメント指針には「教学マネジメントの確立に当たっては、大学教育の成果を学位プログラム共通の考え方やルーブリック等の尺度に則って点検・評価することが必要であり、各授業科目の到達目標について、ルーブリック等を用いてその具体的な達成水準を事前に明らかにしておくことは、厳格な成績評価の実施や学生の学修意欲の向上の観点から有効と考えられる。」との記載があり、ルーブリックを用いた評価の有効性が明示されています。

本学科では、「演技」、「ダンス」などのパフォーマンスを成果物とした授業では、既存の「評価方法」が適用しにくいことや、「総合芸術」である性質上、複数教員担当による科目が多いことから、積極的にルーブリックを導入している。2022年度ルーブリック導入科目は以下の通り。各科目のルーブリックは、添付する⁶¹。

卒業研究・制作

舞台創作基礎Ⅰ
演技・演出Ⅲ
舞台デザインⅢ
演技・演出Ⅵ
舞台デザインⅥ

なお、本学科では、ルーブリック導入科目の「オリエンテーション」において、当該科目がルーブリックを採用していることとルーブリックについての説明を行っている。また、授業期間後半には（合評時には）、学生がルーブリックの「評価観点」と「評価基準」を自らの達成度評価に適用するよう指導している。

■ 成績評価

本学では、成績の評価、評点、評価基準を以下のとおり定めている。

第4条 成績の評価、評点、評価基準を以下のとおり定める。

評定	評点	評価基準	判定	G P	成績通知書への記載	成績証明書への記載
S	90～100	特に優れている (excellent)	合格	4	あり	あり
A	80～89	優れている (good)	合格	3	あり	あり
B	70～79	標準である (average)	合格	2	あり	あり
C	60～69	合格と認められる最低限の成績である (pass)	合格	1	あり	あり
D	0～59	不合格 (fail)	不合格	0	あり	無し
F	評価対象外		不合格	0	あり	無し

※評定「F」は、成績評価の前提となる出席要件を満たしていない（出席率が授業全体時間数の3分の2以上ない）場合に使用する。

（「成績評価に関するガイドライン」第4条⁶²より）

また、「成績分布」に関しては、以下のとおり定めている。

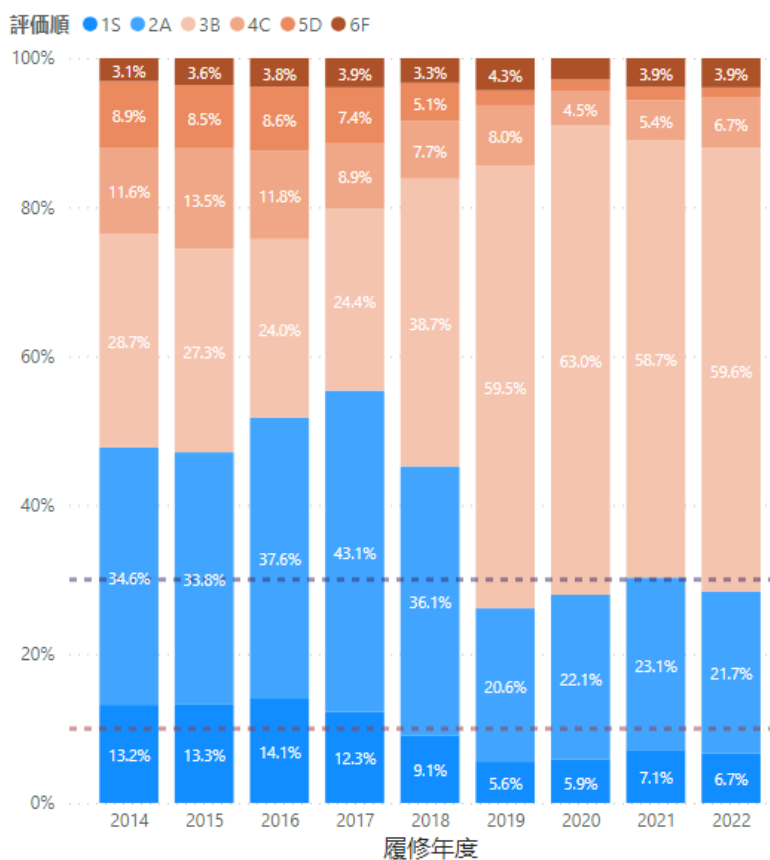
成績評価の標準的な分布は、次のとおりとし、授業担当教員はこの分布となるよう、授業科目の設計を行わなければならない。

S 評価 10%以下 S 評価+A 評価 30%以下

（「成績評価に関するガイドライン」第5条⁶³より）

舞台芸術学科の「成績分布」は、以下の図表の通り。

成績分布



③ 単位認定

「単位認定」について「1単位 45時間の学修が必要である」と大学設置基準⁶⁴によって定められている。これに則り、本学ホームページ在校生専用サイト⁶⁵では、以下の通り記述されている。なお、以下の内容は、学科ガイダンスの際に「単位認定」に関わる事項として説明し、「事前・事後学習」の重要性を強調している。

講義科目：講義を主体とした授業で、授業に対応した予習・復習が必要となる。授業1講時に対し2講時分の自習をしていることを前提として授業が行われる。週1講時の授業で半期科目の場合は2単位、通年科目の場合は4単位。

演習科目：講義と実技・実習を織り交ぜた授業で、授業に対応した予習・復習が必要となる。授業2講時に対し1講時分の自習をしていることを前提として授業が行われる。体育実技等週1講時の授業で半期科目の場合は1単位。

その他の演習科目週2講時の授業で半期科目の場合は2単位。

これは、1単位につき厳密に45時間学修しなければ単位修得不可ということではない。あくまでも、学修時間目標として提示している制度ではあるが、本学では、2021年度後期に实际的な学生の課外学習時間を把握するために、「出席管理システム」を利用して計測を実施した。計測結果によると、本学科学生は、演習科目については90%の学生が適切、もしくは十分な授業外学修時間を取っているが、講義科目については、適切な時間を取っているとは言えなかった。

「単位認定」は、「評価基準／評価方法」またはルーブリックに則って厳密に成績評価がなされた結果との適切な連関が重要である。従って、「評価方法」に指定しているコメントカード、課題・成果物、レポート等は、「単位認定」に関わる根拠資料と認識し、その課題内容やレポートの文字数なども適正化する必要がある。

また、一回性の芸術である「舞台芸術」においては、「演技」、「ダンス」、「歌唱表現」など成果物が後に残らないものを「評価方法」としている科目も少なくない。こうした科目の担当教員には、「シラバス」に評価対象とする発表内容や発表回数等を明確に記述すること、またレポート等を「評価方法」に含めることで、適切な「単位評価」につながる複合的な成績評価の実施を求めている。

④ 教育方法の工夫・開発と効果的な実施

〈授業形態〉

舞台芸術学科では、「教育目標」で強調している各自の独創性を発揮しながら他者と協働し、新たな価値観を創造することを目指して、「講義」、「演習」、また2コースが合同で行う「授業発表公演」等の授業形態を採用している。また、これらの形態の授業は、既述通り、体系的かつ各々の形態の授業が他方と連関するかたちで開講されている。



3年生ミュージカル「FAME Jr.」@春秋座



3年生演劇「農業少女」@春秋座



2年生ダンス「ukiyo」@studio21



2年生演劇「The GREEKS」@studio21

授業と密接に関連付けながら、専任教員の監督、指導のもとで既述の「社会実装プロジェクト」、また「自主企画公演」等のプロジェクトも積極的に実施されている。

「自主企画公演」は、課外の位置づけではあるが、「卒業制作公演」につながる重要なプロジェクトとして実施を推奨している。このプロジェクトは、授業期間外の夏休み、春休み期間中を利用した studio21、Y31 での学生たち主導による自主企画公演で、例年、夏休み期間開催は4月頃に、春休み期間開催は10月頃に企画を募集している。学生企画者は、企画を立案し（上演したい戯曲を選び）、スタッフ、キャストを集めて座組を形成し、「企画書」にまとめて応募する。その後、学科長を中心とした自主企画担当教員による審査を経て、自主企画公演の開催が可能となる。自主企画公演の稽古中は、必要に応じて専任教員が指導に当たるほか、公演開催時は安全監督として専任教員が指導に当たっている。2022年度の自主企画実績は、以下の通り。

2022年度自主企画公演			
公演期間	企画名	公演タイトル	場所
4/2-4/3	稲場企画	musical「gossip girl」	studio21
4/9-4/10	樋熊企画	言霊	Y31
9/6-9/7	藤井・高島企画	Just Be Here	studio21
9/3-9/4	荒屋敷企画	らぶらぶとしている。忘れじの泡。	Y31
10/22-10/23	保井企画	Observation/Normal	望天館屋上
3/1-3/2	白井企画	私の上に降る雪は	studio21
3/8-3/9	佐賀企画	プラナリア計画1st LIVE "THE BEGINNING"	studio21

〈ICT の活用〉

本学科では、教育の質の向上に向けて Google Classroom を利用したレポートやコメントカードの提出、資料や情報の共有などを積極的に行っている。また、2022年度の授業は、新型コロナ感染症拡大に細心の注意を払いながら、原則的にすべて対面で実施したが、対面授業の中でオンラインの活用が有効と考えられる場合には、積極的に採用してきた。例えば、既述の通り舞台芸術の業界は、その制作拠点が東京近郊に一極化していることから関西在住の専門家やクリエイターが少ないが、オンラインで東京近郊に在住する専門家と繋ぎ、教室に集まった学生たちに向けて特別講義を実施するといったことに活用している。こうした ICT は、国内の専門家との間ではもちろんのこと、コロナ禍によって特に大きく制限された国際交流にも活用している。例えば、既述の APB の Directors' MTG や学生演劇祭は、コロナ禍においてもオンラインで実施された。2021年度には、本学科もオンライン学生演劇祭に出展している。

〈アクティブ・ラーニング〉

本学「シラバス」には、以下の「アクティブ・ラーニング」の項目があり、該当科目がどのアクティブ・ラーニングの手法を採用しているのか○で示すようになっている。

アクティブラーニング	<input type="radio"/>	PBL(課題解決型学習)	<input type="radio"/>	反転授業	<input type="radio"/>	ディスカッション	<input type="radio"/>	グループワーク
	<input type="radio"/>	プレゼンテーション	<input type="radio"/>	フィールドワーク				

「協働」による制作を基本としている本学科は、講義科目を含めた多くの授業で「ディスカッション」、「グループワーク」、「プレゼンテーション」が採用されている。ま

た、観劇や劇場バックステージ・ツアーなどの「フィールド・ワーク」も複数科目で採用されている。

〈劇場・ラボを活用した演習〉

「国内最高レベルの劇場が、教室。⁶⁶」としている本学科では、京都芸術劇場 春秋座、studio21 での公演活動実施を目指し、1年次から劇場内外で劇場付帯設備、学科備品を使っての体系的な演習授業が組み込まれている。これらの授業は、舞台芸術研究センターと本学科とで共同運営している「ライセンス」と紐づいており、一部のライセンスを除いて単位修得の要件に「ライセンス取得」が含まれている。具体的には、1年次では本学科学生全員が〔入門ライセンス〕を取得、2年次以降は、各自の専門性に合せて大道具、舞台監督、音響、照明、制作などの〔専門ライセンス〕を取得する流れになっている。また、ライセンス関連の内容以外にも授業内では、「機材機器講習」、「客席講習」、「劇場フロント講習」などが含まれている。また、〔ライセンス〕と公演活動が紐づけられており、「授業発表公演」に関わるためには、〔入門ライセンス〕取得を必須とし、「卒業制作公演」、「自主企画公演」、「作品展」に関わるためには、〔専門ライセンス〕取得を必須としている。

なお、本ライセンス制度は、厚生労働省が定める労働安全衛生規則に則り運営されている。

〈学生の主体的参加を促す授業方法〉

本学科では、学生の主体的参加を促す授業を後押しするために、学科所有の図書、DVD等視聴覚資料を数多く取り揃えている。500冊を超える学科所有の図書は、大阪市立芸術創造館から本学科へ寄贈されたもので、舞台芸術関連の図録、批評、戯曲、演劇誌などが揃っている。100点を超えるDVDは、過去の授業発表公演の録画映像、学科教員が関係した公演等の録画映像、また市販されている演劇公演の録画映像、映画などが揃っており、随時、新たなものを購入している。これらの図書やDVDは、研究室が管理しており、学生は自由に借りることができる。また、学生の意見を反映し、随時、新たな図書やDVDを購入している。授業においても、これらの図書やDVDを活用しているほか、学生が事前・事後学修の資料として積極活用することを促している。

図書・DVD年間貸出数

年間	月平均
414	34.5

〈教育手法の更新・刷新〉

本学科では教育力向上を目指し、FD研修への積極的な参加と学科内での学びの共有を促していることはⅢ1-②で既述した通りである。

加えて本学科では、舞台芸術研究センターと連携した研究を教育手法の更新・刷新のための重要な活動と位置付けている。舞台芸術研究センターは現在、文部科学省より「共同利用・共同研究拠点事業」の認定を受け、研究活動を展開している。2022年度には、同拠点事業の研究の一環である「テーマ研究」の研究代表者として、本学科の専任教員2名がそれぞれ「テーマ研究」を立案し、いずれも2023年度内に実施することが決定している。本学科専任教員による「テーマ研究⁶⁷」概略は、以下の通りである。

テーマ研究①

「土地の記憶と身体表現—旧真田山陸軍墓地を巡って」

研究代表者：岡田落子（舞台芸術学科 専任講師）

研究協力者：筒井潤（所属：dracom、職名：演出、専門分野：演出、役割：演出）

高安美帆（所属：エイチエムピー・シアターカンパニー、職名：俳優、専門分野：俳優、神楽、演出、役割：演出）

小田康徳（所属・職名：NPO 法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会理事長、大阪電気通信大学名誉教授、専門分野：日本史研究、役割：研究会講師）

ほか

研究概要：本研究は、複雑さを内包する旧真田山陸軍墓地の土地の記憶を、身体表現を通して劇場（京都芸術劇場 studio21）で上演し、対話の場へとつなげることが目的である。研究者たちとアーティストがフィールドワークや研究会を通して話し合いながら、5回程度の研究会を行い、最終的に試演の形で舞台作品を創る。

（以上、2023年度「テーマ研究計画書」より抜粋）

テーマ研究②

「次世代舞台音響『イマーシブサウンド』の可能性について

研究代表者：大久保 歩（舞台芸術学科 教授）

研究協力者：日本音響家協会西日本支部、公財）東京都歴史文化財団（東京芸術劇場）、クリストファー・プラマー（Christopher Plummer）：音響デザイナー、システムエンジニア／ミシガン工科大学美術・舞台芸術学部教授（オンライン基調講演ゲストスピーカー）

研究概要：劇場に於ける音響表現の手法は、ステレオ再生から様々な空間音響技術へと、文字通りパラダイムシフトの過程にある。コンサートやミュージカル、演劇に於ける舞台音響では、観客が全方位からの音を聞くことができるイマーシブオーディオ（以下IAと記載）など、最先端の音響技術は日々進化を遂げている。本研究は、既に米国で実際に

IAを導入している音響専門家の体験的所見を参考にしながら、春秋座においてミュージカル公演や演劇公演などの音源を使用し、現在多くのメーカーや研究機関が開発しているIA用のオーディオプロセッサーやソフトウェアの中から、研究代表者および研究分担者が1機種(予定)を選択して視聴し、それらの表現力の特性や特徴を調査、研究する。

(以上、2023年度「テーマ研究計画書」より抜粋)

なお、舞台芸術学科学科長が舞台芸術研究センターの教育・研究担当副所長として兼任しており、以上2件の研究を管理、運営していく。

⑤ 自己評価

①本文中において、本学科教員は、大学が提示している「シラバス」の重要性と重要ポイント、また「教育目標」に沿ったカリキュラムの全体像を十分理解した上で「シラバス」執筆に当たっていることを明らかにした。また、本学科では専任教員全員体制でピアチェックを行い、「シラバス」が学科カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーと整合性のとれた内容になっていること、すべての科目「シラバス」の各項目が適切に表記されていることを証明するために、「2022年度開講科目シラバス」を添付している。

②本文中において、具体的な例を参照し、科目の「到達目標」に対して適切に「評価基準/評価方法」が設定されていることを明らかにした。また、「成績評価ガイドライン」に基づくS評価、S+A評価の比率を遵守し、厳格に成績評価していることを確認している。さらには、教学マネジメント指針に則し、ルーブリックを積極的に導入し、適切な成績評価に繋げていることを明らかにした。

③本学科の各科目シラバスの「事前・事後学修」の項目には、大学設置基準が定めた「1単位45時間の学修が必要」という制度を意識した学修方法が適切に表記されているものの、実態調査からは、十分に学修時間が取れていないことが伺える。この状況を改善するには、「事前・事後学修」の学修方法の適正化だけでなく、必要とされている学修時間に見合った「評価方法」のあり方を模索することが必要だと考える。

④本文中において、本学科では、学科教育目標を達成するための講義、演習、授業発表公演等の授業形態が適切に配置されていること、さらには「卒業制作公演」につながる「自主企画公演」が積極的に実施されていることを明らかにした。また、ICTを国際交流等に活用していること、「ディスカッション」、「グループワーク」、「プレゼンテーション」などのアクティブ・ラーニングに注力していること、劇場とラボを有効活用していることなど、それぞれの授業形態上の工夫を詳述した。加えて、学科研究室が所有する図書やDVD等視聴覚資料を充実させることで学生の主体的学修とそれを可能とする授業をサポートしていること、また、舞台芸術研究センターとの連携事業を活用して教育力向上を図っていること等を明らかにした。

①～④を踏まえ、学科の教育内容・教育方法について適切に設定されていると考える。

4 学修支援

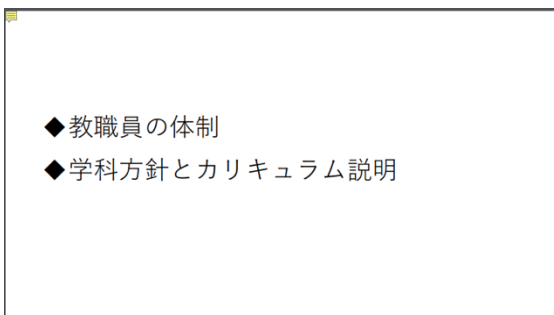
① 学修支援体制

■ 初年次教育で行っている工夫

【新入生ガイダンス】

「新入生ガイダンス」では、以下のパワーポイント資料を使いながら、本学科の特色、学科「教育目標」、学科DPと学科カリキュラムの全容、4年間の学位プログラムの中での1年次教育の位置づけ等の説明から入り、在校生サイト「学修ガイド」に記載された内容の中で特に重要と思われる「学年暦」、「卒業要件」、「CAP制」、「GPA」、「成績評価」、「出欠席の取り扱い」等について一部「教学ガイダンス」で扱っている内容も含むことを承知の上で説明している。履修に関しては、「履修登録期間」、登録修正の重要性と「登録修正期間」、「シラバス」の見方などを簡潔に説明してから、「必修」、「選択必修」、「選択科目」などの専門科目の編成といくつかのパターンに分けた積み上げ方（履修の方向性）についてカリキュラム・ツリーを用いて説明している。また、特に「進級要件」となっている「創作基礎Ⅰ」や事前エントリーが必要な科目については、丁寧に説明している。また、「履修上の注意」については、担当教員または該当科目のコース主任が説明を加えている。

「新入生ガイダンス」資料（一部抜粋）



卒業要件				
卒業要件について (在校生専用サイト>学修ガイド>学位の授与・卒業認定・卒業要件)				
	①+②+③ 合計	①創造学習科目 芸術教養科目	②専門科目	③自由選択科目
2020～2023年度 入学生	124単位以上	・創造基礎科目群から 3単位以上 ・全体で40単位以上	全体で60単位以上	単位互換で修得した 単位など (学芸員科目など)
2018・2019年度 入学生	124単位以上	・キャリア創出科目群 から6単位以上 ・全体で40単位以上	全体で60単位以上	単位互換で修得した 単位など (学芸員科目など)



履修登録（コース別科目についての注意点）

演技・演出コース

「演技・演出」
【演技・演出コース必修科目】
ABクラス分けを行うので、研究室で登録します。皆さんは履修登録は不要です。

履修登録
作業不要

舞台デザインコース

「舞台デザイン」
【舞台デザインコース必修科目】
事前登録してあります。みなさんで登録は不要です。

履修登録
作業不要

「舞台デザイン」
【演技・演出コース必修科目】
選択で履修することが可能です。
履修希望する人はフォームより申し込んでください。

フォーム
記入必要

「演技・演出」
【舞台デザインコース必修科目】
選択で履修することが可能です。
履修希望する人はフォームより申し込んでください。クラス分けを行い研究室で登録します。

フォーム
記入必要

【「コラボレーション基礎」ラーニング・リテラシー／協働を学ぶ】

「大学で舞台芸術を学ぶということ」をテーマとしたこの授業は、「教育目標」を達成する力を身につけるための入門として初年次教育の重要な柱と位置付けている。以下の内容が含まれている。

〈ラーニング・リテラシーとしての授業〉

- ・ III-2-1 で既述の通り、PDCA サイクルの説明とともに DPA (DP 達成度評価) の使い方を説明している。
- ・ インタビュー・ゲームを使った授業で傾聴／メモの取り方／プレゼンテーションを学ぶ。
- ・ フィールド・ワークを取り入れ、図書館、京都芸術劇場 春秋座について学ぶ。
- ・ 「舞台芸術学科を学ぶ」として、過去の授業発表公演のダイジェスト映像を視聴し、グループに分かれて気づきや感想を話し合う
- ・ III-②-2 で既述の通り、学科の進路決定率の概況やキャリアに対する取り組みを説明した後、4年生を呼んでの「ロールモデル研究」を実施している。

〈協働を学ぶ〉

- ・ 協働力促進を目的に本学科が独自開発した「ハリガネマン」、「人間マシーン」、「立体造形」、「キャンパスは劇場だ!」などのワークショップを実施している。これらはすべて「グループワーク」、「ディスカッション」が含まれているほか、各授業の「振り返り」も重要視している。
- ・ 「中間のまとめ」、「前期のまとめ」の授業を配置し、「振り返りワークショップ」と授業内でのレポート作成を実施している。

【個人面談】

新入生は、履修指導面談も含めて担当教員による年3回の個人面談を実施している。5月から6月にかけて実施している面談では、学生本人による DPA 記載情報を参照しながら、主に学生生活を送る上で問題や不安はないか確認する。10月から11月にかけて実施している面談では、主に意欲や目標について確認する。3回目の面談は、3月に履修面談として実施している。

その他、特に5、6月期面談では、以下の情報を聞き取り、KUALA⁶⁸上において他教員と情報共有している。

既往症の有無 実家からの通学／一人暮らし アルバイトの有無、アルバイトをしている場合には時間帯や時間数 演劇経験の有無 協働への得意／苦手意識

■ 学科ガイダンス

4年間の大学生活の基礎となる重要な情報を多く含んだ「新入生ガイダンス」については既述したが、2年次以降のガイダンスにおいて強調している事項は、以下の通りである。

2年次前期：「授業発表公演」科目の履修条件、「授業発表公演」とその他の授業との連

関、その他の授業との両立の仕方⇒カリキュラム・ツリーを用いて説明

2年次後期：キャリア・ガイダンスが付加される

3年次前期：「卒業研究」を視野に入れた演習科目の履修⇒カリキュラム・ツリーを用いて説明

3年次後期：「授業発表公演」とインターンシップをはじめとする就活準備との両立

4年次前期：「卒業要件」の充足、「卒業研究」と就活との両立⇒カリキュラム・ツリーを用いて説明

4年次後期：卒業制作公演実施に向けての注意事項、個人研究完成に向けての注意事項、「卒業研究」合評、卒業展の実施について

■ 個人面談（学修面談／履修指導面談）

新入生個人面談に関しては既述の通りの面談を実施している。2年次以降は、後期期間中に担当教員による定期面談を実施している。特に3年次後期の面談は、日常的な学修状況を確認するほか、キャリア面談と位置付けて以下の事項を確認している。

〈演技・演出コース〉、

夏期インターンシップを経ての所感 a 俳優、芸能の道を選択／b 一般就職 a 選択の場合は、希望する芸能事務所、劇団の有無、bを選択の場合は、希望業種、職種、希望勤務地 等

〈舞台デザインコース〉

夏期インターンシップを経ての所感 a 専門就職／b 一般就職 a 選択の場合の場合は、希望領域、就職希望企業の有無、bを選択の場合は、希望業種、職種、希望勤務地 等

履修指導面談では、これまでの修学状況（成績、単位修得状況、必修／選択必修の修得状況、DPの修得状況）を振り返り、目標を設定した上で、今後の履修科目の提案や確認をしている。

学修面談、履修指導面談のほかにも、成績開示後に学修指導対象（GPA1.0未満）となった学生とその保護者との三者面談を実施している。学修指導面談では、成績不振の原因を明らかにし、その解決策を話し合うことで、学習意欲の向上を促している。

この他にも、専任教員は、担当する学生の週次出欠状況を受け取り連続欠席が見られる学生には、メール、または口頭で注意を呼びかけ、場合によっては面談を実施している。また、すべての専任教員が、随時、学生からの相談を受け付け、必要に応じて面談を実施している。

■ 多様な学生への学修支援（留学生／障がい学生支援）

本学では近年、留学生の増加が目立っているが、本学科においては、学科の特性上から各学年1名ないし2名程度の在籍にとどまっている。しかし、留学生が少ないからこそその孤独感なども感じやすい状況にあることを踏まえ、留学生の担当教員は、頻繁に声をかけ、修学や学生生活の様子を確認するようにしている。また、場合によっては、留学経験のある教員が面談に同席し、相談にのるようにしている。

一方、障がいを持つ学生、または持つと考えられるグレーゾーンの学生は、年々、増加傾向にある。障がいや修学に影響すると考えられる場合には、学生本人の許可を得た上で保護者に連絡し、可能な限り三者で相談しながらより有意義な学修が可能になるよう図っている。

② キャリア支援

本学科では、2年次後期ガイダンス、3年次前期ガイダンスの後に、それぞれ、キャリア・ガイダンスを実施している。キャリア・ガイダンスでは、キャリア・デザイン・センター（以下、CDCと表記）が作成した資料に、舞台芸術学科の進路パターンの特性や概況を加えて説明している。

3年次後期の個人面談を「キャリア面談」と位置付けていることは、既述の通りだが、その後も随時キャリア面談を受け付けている。また、4年次の「卒業研究・制作」の授業では、就活状況の確認やそれに伴うキャリア指導を導入している。就活状況の芳しくない学生は、CDCの協力を仰いでいる。

学科独自のキャリア・イベントとしては、学科が提携している四季（株）（劇団四季）による特別インターンシップを開催している。2022年度は、新型コロナウイルス感染拡大を受けてオンライン開催となったが、2023年度は、劇団四季あざみの本社、または各劇場において対面での研修を実施する予定。この特別インターンシップでは、舞台監督、音響、照明、衣装などの領域に分かれて、2日間から7日間程度の研修が行われる。

③ 自己評価

①本文中では、本学科が実施している「初年次教育での工夫」を詳述した。本学科では、「1年次離籍率」が改善傾向にあることから、効果的な初年次教育が実施され、支援体制も適切に整備されていると考える。その他、ガイダンス、個人面談などきめ細かい支援が設定されていることを明らかにした。これらについては、「学生生活・学習アンケート」での関連項目の満足度の高さから判断し、適切かつ効果的な学生支援体制が整備されているものとする。

②本文中では、本学科におけるキャリア支援やその工夫を明らかにした。本学科の進路決定率は、ここ数年にわたり安定的に高水準を維持していること、また、卒業時「学生生

活・学習アンケート」での関連項目の満足度の高さから判断し、適切なキャリア支援体制が整備され機能しているものとする。

IV 学修成果・教育成果

1 学習成果・教育成果

① 教育内容・学修指導「学生生活・学習アンケート」

ここからは、全学的に全学年の学生を対象に毎年実施している「学生生活・学習アンケート」の結果から、本学科の「教育内容」および「学修指導」を検証していく。以下、2020年度から2022年度までの本学科「教育内容」と「学修支援」の満足度をそれぞれ学部平均と比較した表となっている。

	2020		2021		2022	
	学部	学科	学部	学科	学部	学科
回答率	80.5%	81.6%	72.1%	88.1%	77.7%	88.6%
所属学科の教育内容に満足していますか。	88.5	93.7	90.1	89.4	92.1	94.2
所属学科の学修支援（学習・大学生活・進路など）に満足していますか。	85.5	91.1	88.2	87.1	92.1	96.1
大学生生活の総合満足度	87.0	91.4	92.2	94.2	93.3	96.1

概ね本学科は、この3か年にわたり学部平均と比較しても高い満足度を維持している。特に、2020年度は、コロナ感染拡大の影響により前期中のすべての授業がオンラインとなったにもかかわらず、高い満足度となっているのは、本学科教職員が創意工夫し未曾有の事態に向き合った結果だと考える。2021年は、わずかではあるが「教育内容」、「学修支援」ともに学部平均より低い数値となっている。また、3か年の数値を比較しても2項目ともに落ち込んでいる。これはあくまでも推測でしかないが、「コロナ疲れ」が影響した結果ではないだろうか。本学科ではこの3年間、当然のこととして、演技やダンス、歌唱などの授業はマスクを着用して行われた。また、授業発表公演に関しては、稽古はマスクを着用して行い、公演直前に関係者全員が抗原検査を受検し、陰性を確認しての実施とな

っていた。この結果は、こうした苦境を強いられた学生たちによる「舞台芸術」そのものに対する主観的評価だと考える。

2022年度は、数値が改善されると同時に3か年の中で2項目ともに一番高い満足度となっている。これは、学生たちが諸般のコロナ対応に適応できるようになったことと、学科教職員一人一人が長引くコロナ禍で「いかに舞台芸術教育を成立させていくか」を真剣に考え努力した結果だと考える。

② 教授力 授業改善アンケート

ここからは、前期、後期の各授業終了時に実施されている「授業改善アンケート」の結果から「教授力」を検証していく。各質問に対し4点満点で評価されるこのアンケートでは、Q1からQ3までが学生自身の授業への取り組みに対する質問となっており、Q4からQ9までが授業運営や教授力に対する質問となっていることから、ここでは、Q4～Q9までの結果を対象として検証する。

Q4～Q9の質問内容は以下の通りである。

Q4：教員はシラバスに記載されている授業の目的、到達目標、評価方法をわかりやすく説明した

Q5：この授業は開始時間と終了時間が守られていた

Q6：この授業はシラバスに沿って適切なスピードで行われていた

Q7：この授業は学生の質問や意見を聞く配慮がされていた

Q8：教員は、授業をわかりやすくするための工夫を行っていた

Q9：この授業は、進め方や内容・あなたが得た成果などを振り返ってみて、全体として有意義な授業だった。

本学では、教育の質を担保するため、Q4～Q9のアンケート結果に基づき、教授法の改善活動を実施している。概要は以下の通り。

区分Ⅰ Q4～Q9の結果が、1項目以上3未満となった場合

区分Ⅱ Q4～Q9の項目平均が3未満となった場合

Ⅰ、Ⅱの対象となった場合には、「授業改善計画書」を提出し、FD研修「授業カイゼン（春・秋）」を受講することが義務付けられている。Ⅱの対象者については、学科長が副学長、あるいは学部長と面談し、対象者の改善活動について報告する。Ⅰ、Ⅱにおいて複数年度累積した場合には、副学長、学部長との面談や担当変更の検討がなされる。

本学科の授業改善対象者数は、以下の通り。なお、本学科では連続して対象者となっている教員はいない。

授業改善対象者		舞台		学部
2022年度	前期	1名	区分	33名
	後期	1名	区分	17名
2021年度	前期	1名	区分	40名
	後期	1名	区分	32名
2020年度	前期	1名	区分	63名
	後期	0名	区分	70名
2019年度	前期	1名	区分	43名
	後期	0名	区分	42名

本学科の改善対象者は、他学科と比較しても少数であり、所定の改善活動を行った後、次の年度ではいずれも改善されている。

アンケート結果が改善対象者と連動している一方で、FD委員会による「グッドティーチャー顕彰制度」とも連動している。本学科では、2021年度に1名（非常勤講師）、2022年度に1名（専任教員）が「グッドティーチャー」に選ばれ表彰されている。

Q4～Q9の平均値は、以下の通りである。

Q4-Q9の平均		
	2021年度	2022年度
学部	3.68	3.73
舞台芸術学科	3.73	3.73

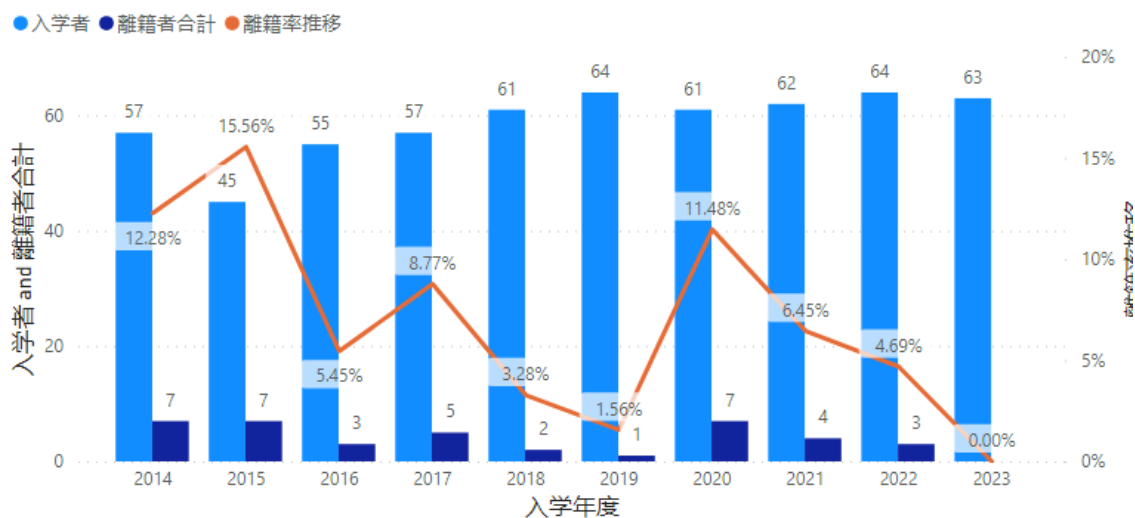
この2か年の本学科平均値は、学部平均と比較して高い数値、または同数値となっている。この結果から、本学科の教員は、客員教授、非常勤講師を含め、優れた教授力を持っており、良好な授業運営を行っていると考えられる。

③ 初年次教育力 「1年次離籍率」

ここからは、1年次離籍率から初年次教育の成果を検証する。本学では、1年次離籍率は、その後の離籍率と連関があるとし、4年間を通しての離籍抑止に繋げるためにも初年次教育の見直しや改善に力を入れてきた。

本学科の「1年次離籍率」の推移は以下の通りである。

学科 1年次離籍率



本学科は、離籍率の高い学科だったが、初年次教育を再三見直してきた成果として2017年度以降、改善傾向にあった。2020年度の急増は、明らかにコロナ感染拡大の影響によるものである。特に2020年度前期は、演技の演習授業を含めてオンラインでの実施を強いられた。また、複数の演習科目が開講できなかった。当時の離籍者の「退学理由」からも、そういった不測の事態への不満と不安が離籍に繋がったことが窺い知れた。

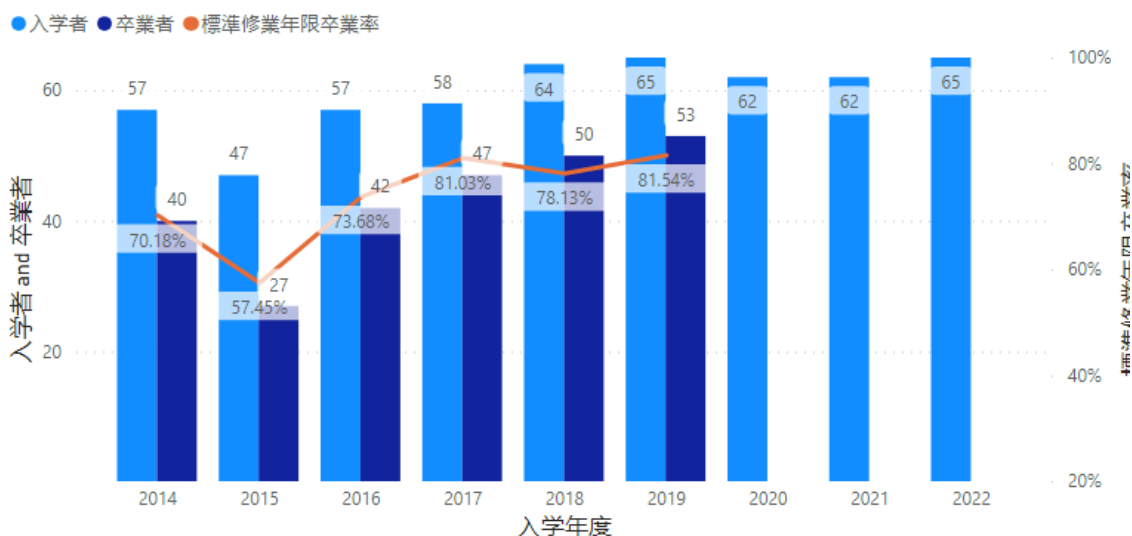
その後、2021年度以降は、再び改善傾向にある。コロナ感染拡大が一段落した今、初年次教育の成果が順当に表れている結果だと考える。

④ 標準終業年限での卒業率

ここからは、標準就業年限での卒業率から教育成果を検証する。本学科と学部全体の「標準年限卒業率」は、以下の通りである。

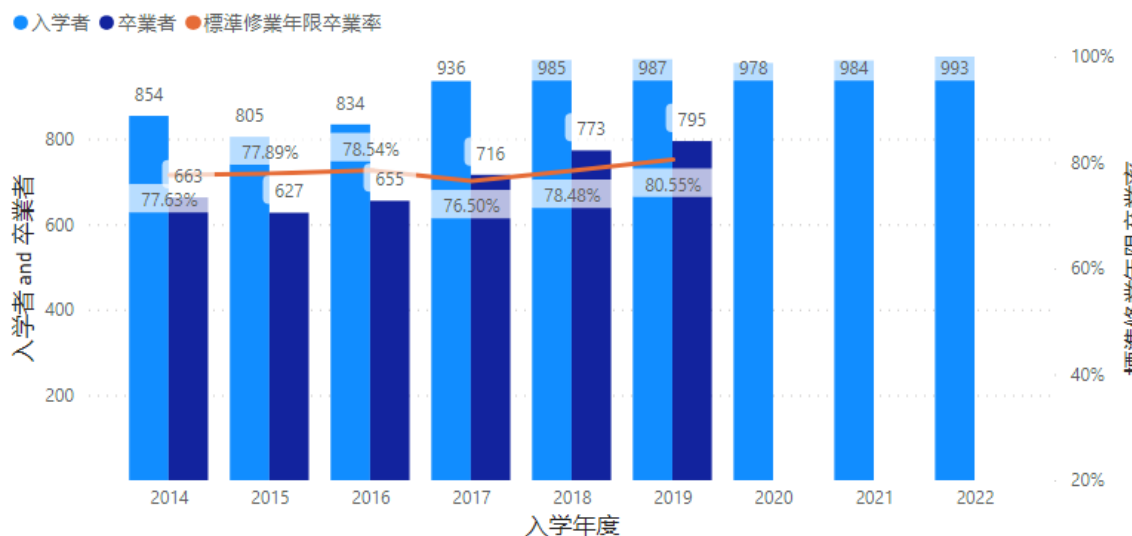
【舞台芸術学科】

学科 標準修業年限卒業率



【学部全体】

学科 標準修業年限卒業率



1年次離籍率が非常に高かった2015年度以降は、離籍率と相関することなく学部平均と比較しても安定的に高い数値で推移している。これは、何らかの理由で離籍をする人は出ているものの、在籍者は本学科の教育内容を概ね満足して享受し、順当に修学していることを表していると考えられる。

⑤ カリキュラムの各段階に応じた目標達成度

ここからは、いくつかの指標を用いてカリキュラムの設計通りに学生が成長できているかを検証する。

■ PROG

本学では、2020年度より学生のジェネリックスキルを測定するために外部アセスメントテスト「PROG」を導入した。本学学生は、入学時と3年次にPROGを受検し、ジェネリックスキルとその能力変化を測っている。PROGテストは、以下の2つの観点から測定し、受検者は、自身のジェネリックスキルを客観的に把握することができる。

コンピテンシー： 周囲の環境と良い関係を築く力

リテラシー： 実践的に問題を解決に導く力

また、PROGの結果開示後には、受検した学生を対象に解説会を開催している。

本学科学生平均と学部平均は、以下の通りである。

コンピテンシー

1年次	2023		2022		2021		2020	
	舞台	学部	舞台	学部	舞台	学部	舞台	学部
C_1 総合	3.59	3.14	2.91	3.27	3.24	3.16	3.53	3.10
C_1 対課題基礎力	3.33	3.26	3.08	3.46	3.19	3.39	3.00	3.17
C_1 対自己基礎力	3.76	3.32	3.36	3.40	3.68	3.37	3.71	3.37
C_1 対人基礎力	3.90	3.44	3.11	3.53	3.59	3.40	3.86	3.39

3年次	2022	
	舞台	学部
C_1 総合	3.15	3.24
C_1 対課題基礎力	2.79	3.33
C_1 対自己基礎力	3.62	3.54
C_1 対人基礎力	3.49	3.54

リテラシー

1年次	2023		2022		2021		2020	
	舞台	学部	舞台	学部	舞台	学部	舞台	学部
L_1 総合	4.54	3.94	4.19	3.70	4.70	4.25	4.80	4.30
L_1 課題発見力	3.49	3.16	3.09	3.09	3.48	3.22	3.54	3.23
L_1 言語処理能力	3.51	3.29	3.39	3.20	3.70	3.36	3.63	3.44
L_1 構想力	3.49	3.11	3.36	3.09	3.37	3.21	3.64	3.30
L_1 情報収集力	3.67	3.44	3.77	3.34	3.42	3.48	3.78	3.33
L_1 情報分析力	3.65	3.33	3.56	3.17	3.63	3.27	3.31	3.29
L_1 非言語処理能力	3.35	3.20	3.56	3.13	3.22	3.09	3.34	3.25

3年次	2022	
	舞台	学部
L_1 総合	4.90	4.50
L_1 課題発見力	3.58	3.35
L_1 言語処理能力	3.56	3.18
L_1 構想力	3.75	3.43
L_1 情報収集力	3.65	3.61
L_1 情報分析力	3.29	3.26
L_1 非言語処理能力	3.27	3.13

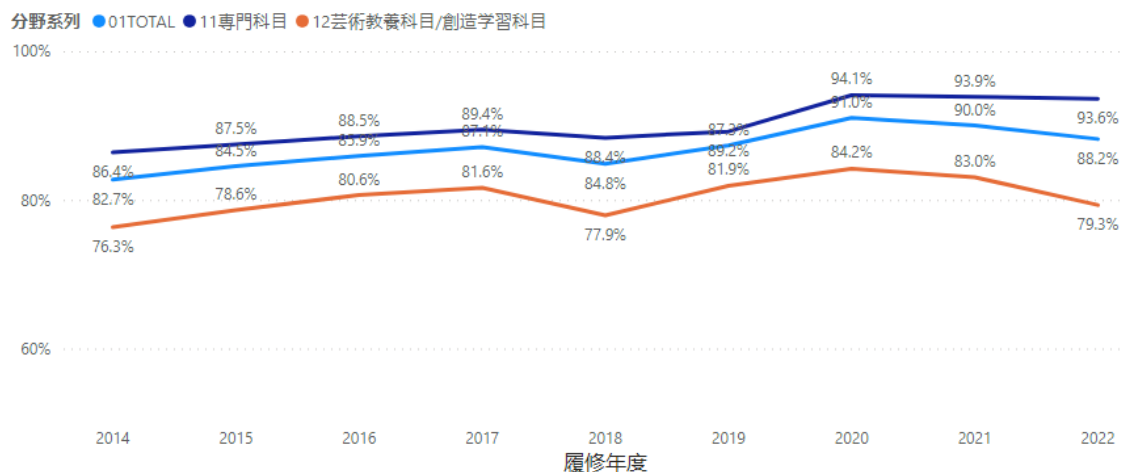
この結果を受けて気になるのは、「コンピテンシー」において、3年次の結果が入学時より低くなっていることだ。これは、PROG解説者によると、特に「コンピテンシー」は、受検のタイミングや環境等によって結果が左右されるが、多くの場合は一時的なことであり、例えば1年後に受検したときには、成長が見られるとのことだった。本学科の3年次生は、2年次で初めての大きな協同作業である「授業発表公演」を経験し、一時的に「協働力」、「親和性」、「統率力」等に対する自信を喪失していることが考えられる。PROGは結果の信頼性を高めるためにも、受検時期の妥当性など検討の余地があると考えられる。

■ 単位修得率

学部と本学科の「単位修得率」の推移は、以下の通りである。

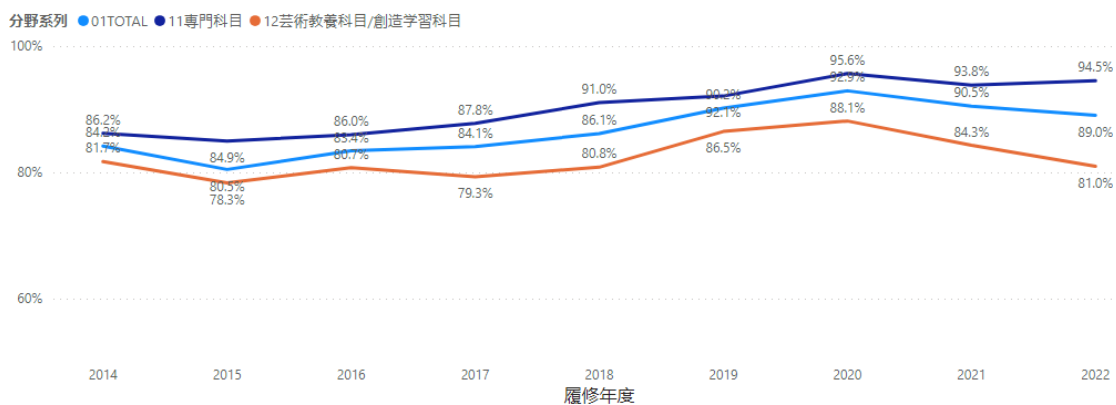
学部

芸術学部 年度別単位修得率推移



舞台芸術学科

学科 年度別単位修得率推移



特にここ5か年の本学科の「単位修得率」は、学部平均と比較して高い数値を維持している。この数値の「専門科目」については、各学科による差異があるため比較材料としては適切ではないが、全学合同の「芸術教養科目/創造学修科目」に関しては、信頼性があると考えられる。「芸術教養科目/創造学修科目」のみで比較しても本学科は、高い修得率を維持していることが見て取れる。

■ GPA 平均値の年次推移

芸術学部

経過年度	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
1	2.47	2.52	2.63	2.60	2.27	2.09	2.15	2.13	2.04
2	2.29	2.37	2.37	2.14	2.01	2.06	2.11	2.01	
3	2.27	2.24	2.08	1.86	1.99	1.99	1.91		
4	2.40	2.13	2.02	2.10	2.09	2.07			

舞台芸術学科

経過年度	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
1	2.48	2.41	2.55	2.63	2.37	2.28	2.02	2.07	2.10
2	1.98	1.98	2.39	2.13	1.91	2.22	1.99	1.88	
3	2.21	1.87	2.06	2.05	2.05	2.08	1.94		
4	2.12	1.95	1.97	2.16	2.04	2.06			

本学科 GPA に関しては、特にここ5か年の数値を学部平均と比較した時、2020年度を境に、下回る成績となっている。まず、「単位修得率」は学部平均以上を維持しているにもかかわらず、GPAが低いということは、平均より低いGPで単位修得していることを意味する。20年度以降、こうした傾向が見られるのは、オンラインによる授業の増加が影響していると考えられる。主観的な推測ではあるが、他学科と比較して、オンラインに不慣れ、もしくはオンラインを好まない学生が多いように感じられる。22年度入学生が好転しているのは、高校時代の大半をコロナ禍で過ごした世代となり状況が変わってきたのかもしれない。22年度入学生の推移を見守りたい。

GPAは、学科、学部平均ともに学年が上がるごとに下がっていき、4年次で再び上昇する傾向にある。これは、学年を追うごとに単位修得不可となる科目が増えるためだと考える。4年次生は、「卒業研究・制作」が中心となるため、再び上昇していると考えられる。

■ GPT

GPT (Grate Point Total) は、GPA に取得単位数を乗じた値で、取得単位数に比例する。DPA 活用マニュアル⁶⁹では、「GPA は「広く学問に関心を持ち、多くの科目を履修する機会を与えない」側面があるため、学修成果の「質」だけでなく「量」についても評価の対象とした指標として活用」と説明している。本学学生は、DPA において自身の GPA だけでなく GPT も確認することができる。

本学科の GPT 平均値の推移は以下の通りである。

芸術学部	舞台芸術学科	2014	01TOTAL	125.2	84.0	72.6	30.4	35.0				
芸術学部	舞台芸術学科	2015	01TOTAL		120.6	84.3	59.2	28.3				
芸術学部	舞台芸術学科	2016	01TOTAL			125.7	50.4	65.4	28.7	54.0	46.0	56.0
芸術学部	舞台芸術学科	2017	01TOTAL				128.8	89.4	62.3	36.3	34.0	
芸術学部	舞台芸術学科	2018	01TOTAL					113.4	82.5	69.9	25.8	19.3
芸術学部	舞台芸術学科	2019	01TOTAL						107.8	102.3	60.3	21.8
芸術学部	舞台芸術学科	2020	01TOTAL							89.1	92.9	61.4
芸術学部	舞台芸術学科	2021	01TOTAL								94.1	82.6
芸術学部	舞台芸術学科	2022	01TOTAL									100.7

2023年3月卒（2019年度入学）のGPTは、以下の通りとなる。

$$107.8 + 102.3 + 60.3 + 21.8 = 292.2$$

卒業要件124単位にGP標準値B=2を乗じると248となる。従って、2019年度入学生は、学修成果の「量」も獲得して卒業していると言える。

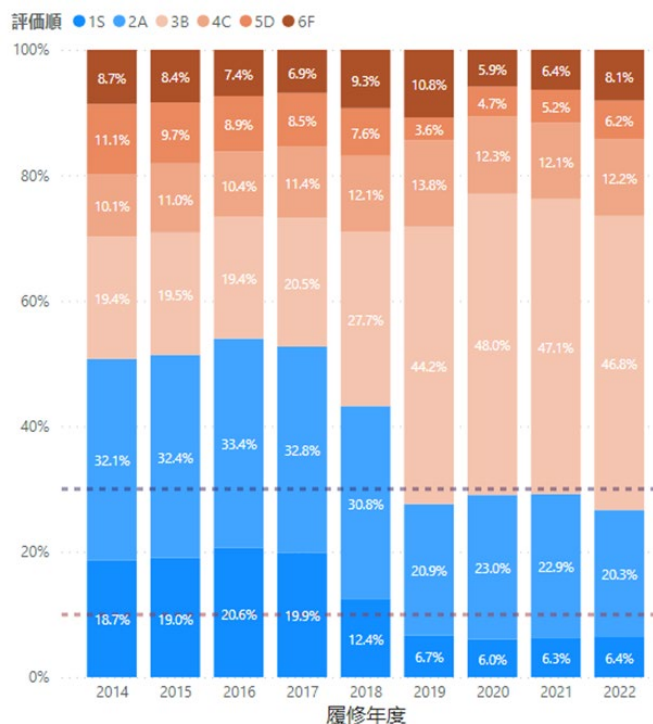
2020年度入学生の1年次GPTが低いのは、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて初年次芸術教養科目「クリエイティブベーシック」（5単位）が開講されなかったためと考える。

■ 成績分布

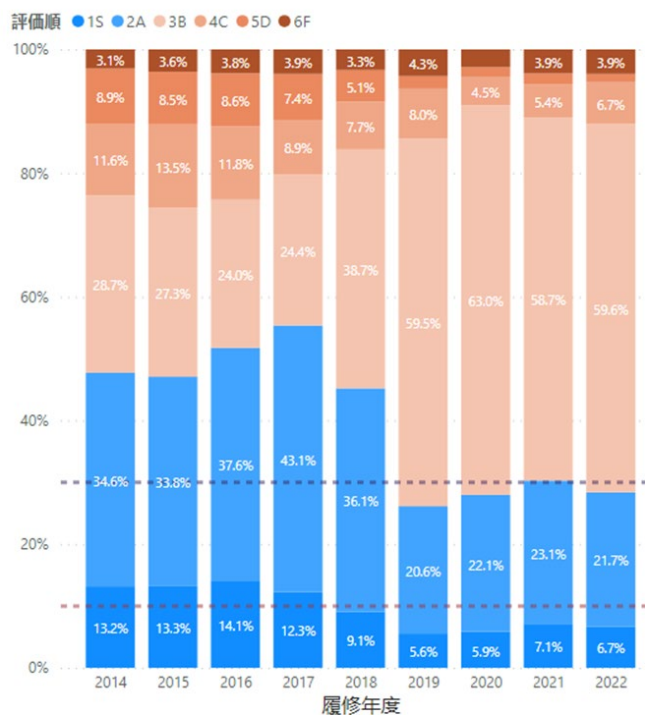
III-3-②では、「成績評価」の妥当性を検証するために「成績分布」を参照したが、ここでは、C（標準以下）、D、F（単位修得不可）の割合を検証するために参照する。

学部と本学科の成績分布の比率は以下の通りである。

芸術学部



舞台芸術学科



過去5か年程度の本学科のC、D、Fの分布比率と学部のそれとを比較すると、本学科は低い数値で推移していることがわかる。従って、本学科は、単位修得率が学部平均以上で推移していると同時に、標準値B以上で単位修得している率が高いことが窺える。この結果は、GPAにおける検証と矛盾している。これは、分布図が「専門科目」のみを対象としていることから起きている。従って、本学科の学生は、「専門科目」に関してはB以上で単位修得している率が高い一方で「芸術教養科目」に関しては、C評価が高いということが推測される。

■ 卒業研究・制作

本学科「卒業研究・制作」の概要については、III-2-②で詳述したが、ここでは、当該科目の成績分布の推移を観ることで学修成果を検証する。

まず、以下は「卒業研究・制作」の「ルーブリック⁷⁰」である。

令和4(2022)年度 自己点検・評価報告書
舞台芸術学科

卒業制作公演

評価観点	評価対象	評価の説明	S(90+) / A(78~80) / B(77~70) / C(69~80) / D(59-)
			授業の目的(期待できる目標)を越えたプロフェッショナルなレベルに到達している
継続性 主体性	授業態度 稽古/制作/プランニング/演出/制作/ノート	上演に向けて自身の役割を理解し、常に工夫や努力を重ねて主体的に稽古に参加していたか、または、常に工夫や努力を重ねて主体的にプランニング、稽古ができていたのかを評価する。	授業の目的(期待できる目標)を達成している
技術力	卒業制作公演 上演作品	自身の役割、役職において求められている技術、技能を表現し、成果に貢献できているか。	期待目標と到達目標の間を達成している
表現力	卒業制作公演 上演作品	作品(戯曲)のテーマや世界観、内容を主体的に理解し、独自の表現によって成長の豊穡性に貢献できているかを評価する。	到達目標を達成しているが改善の余地がある
協働	卒業制作公演 上演作品	他者と協働して協働的な成果に貢献できているか。また、他者(出演者)や他部署の成果物(技術や設備)を主体的に理解し、自身の技術や表現と相乗的に作用することで協働による効果を生み出すことが成果に貢献できているかを評価する。	到達目標を達成できていない

個人研究 (論文、研究ノート)

評価観点	評価対象	評価の説明	S(90+) / A(78~80) / B(77~70) / C(69~80) / D(59-)
			課題に対して積極的に独自のアイデアや方法論を取り入れながら執筆に当たり十分な成果につながった
継続性 主体性	授業態度 研究課題	成果物(論文、研究ノート)の完成に向けて定時に出席し、授業、他者に質問し、協働して課題に取り組むことに取り組んでいるか。また、他者(出演者)や他部署の成果物(技術や設備)を主体的に理解し、自身の技術や表現と相乗的に作用することで協働による効果を生み出すことが成果に貢献できているかを評価する。	課題に対して一定の主体性、独自性が認められ成果につながった
形式・構成 社会的文責	最終原稿	規定の形式・引用、参考文献等が適切に記述されているか。また、参考文献・引用先が適切に記述されているか。また、参考文献・引用先が適切に記述されているか。また、参考文献・引用先が適切に記述されているか。	課題に対して主体性、独自性が認められなかったが、なんとか成果物が完成した
企画力 思考力・洞察力	最終原稿	「研究課題」に関連する先行研究の必要性を十分に理解し、独自の視点から研究課題を設定しているか。また、研究やリサーチ結果を独自の視点をもって考察し、非常に説得力のある結論が導き出されているか。	課題に対して主体性、独自性が認められなかったが、なんとか成果物が完成した
リサーチ 研究方法 記述	最終原稿	自分の研究課題を解決するために適切な参考文献や研究方法を選択できているか。また、研究やリサーチ結果を独自の視点をもって考察し、非常に説得力のある結論が導き出されているか。	課題に対して主体性、独自性が認められなかったが、なんとか成果物が完成した
客観性 批評性	口頭試問	自らの研究を客観的に振り返り批評できているか。また、他者(出演者)や他部署の成果物(技術や設備)を主体的に理解し、自身の技術や表現と相乗的に作用することで協働による効果を生み出すことが成果に貢献できているかを評価する。	課題に対して主体性、独自性が認められなかったが、なんとか成果物が完成した

個人研究 (戯曲執筆)

評価観点	評価対象	評価の説明	S(90+) / A(78~80) / B(77~70) / C(69~80) / D(59-)
			課題に対して積極的に独自のアイデアや方法論を取り入れながら執筆に当たり十分な成果につながった
継続性 主体性	授業態度 研究課題	成果物(戯曲)の完成に向けて定時に出席し、授業、他者に質問し、協働して課題に取り組むことに取り組んでいるか。また、他者(出演者)や他部署の成果物(技術や設備)を主体的に理解し、自身の技術や表現と相乗的に作用することで協働による効果を生み出すことが成果に貢献できているかを評価する。	課題に対して一定の主体性、独自性が認められ成果につながった
形式・構成 社会的文責	最終原稿	上演を想定した上演可能な原稿、場面構成などの基本形式が適切に記述されているか。また、登場人物、時間、場所(時代等)が明確に記述されているか。また、社会に貢献することを意識した原稿であるか。	課題に対して主体性、独自性が認められなかったが、なんとか成果物が完成した
テーマ性 ストーリー性(戯曲)	最終原稿	時代背景・社会性・個性と自身の関連性などをテーマとして設定しているか。また、登場人物に力を与えることにより、自らが生み出したテーマが表現されているか。	課題に対して主体性、独自性が認められなかったが、なんとか成果物が完成した
文章表現力 台詞表現力	最終原稿	演出家や俳優にとって良い意味で刺激的な魅力ある台詞表現によって展開されており十分に説得力がある。	課題に対して主体性、独自性が認められなかったが、なんとか成果物が完成した

以下は、3か年の「成績分布」の推移である。

「卒業研究・制作」成績分布 (%)

	S	A	B	C	D	F
2020	6.1	10.2	75.5	8.1	0.0	0.0
2021	1.9	21.1	69.2	7.6	0.0	0.0
2022	3.2	16.3	67.2	8.2	0.0	4.9

この3か年、90%以上がB評価以上で単位修得している。近年の傾向としては、CまたはF評価が増えていることだ。これは、卒業公演企画を途中離脱し、個人企画に変更するケースが増えていることを意味する。

2022年度 卒業制作公演



布施企画 ミュージカル『無題 MONO』@studio21



藤枝企画 演劇「メディア」@春秋座



稲葉企画 演劇「来来来来」@studio21

⑥ 自己評価

①～⑤まで多角的に点検し、学習成果・教育成果を検証してきたが、各々の本文中で記述の通り、いずれの数値も改善傾向にある、または学部平均より高い水準で推移していることが明らかになった。従って、本学科は、学修成果、教育研究活動の成果として概ね当初の目的を達成していると考ええる。

課題が残るとすれば、近年、「卒業研究・制作」の卒業制作公演参加者の途中離脱が目立つことである。毎年、1、2名の離脱者を出しているにすぎないが、集団制作の中での離脱は、その後の企画運営に大きな影響をもたらしている。離脱者を出さないためには、3年次までの「協働力」を身につける授業の見直しと、公演企画の座組を形成するまでのプロセスの見直しが必要だと考える。

2 進路状況

① 人材育成目標に対する達成状況

■人材育成目標

本学は、「進路決定率 90%を恒常的に維持し、進路の質を高める教育改革⁷¹⁾」を掲げ、学部の人材育成目標を「進路決定率 90%」、「早期内定率 70%」、「正規就職率 80%」としている。この中で、「正規就職率」は、業界特有の雇用形態があることから、学科独自の目標設定が可能となっており、舞台芸術学科は「正規就職率 70%」を目標としている。

以下、「舞台芸術学科」と各コースの目標達成状況の推移を示した表となっている。

舞台芸術学科

	20.3卒	21.3卒	22.3卒	23.3卒	24.3卒	学部目標
①進路決定率	95.2%	93.9%	98.1%	98.2%		90%以上
②就職率	94.9%	93.8%	98.0%	98.1%		90%以上
③早期内定率	75.6%	65.3%	76.0%	80.4%		70%-80%以上
④正規就職率	59.0%	60.4%	77.6%	70.4%		80%以上 ※独自70%
⑥進路満足度(卒業時)	82.9%	86.0%	87.0%	91.9%		
13学科内順位	2位/13学科	4位/9学科	4位/14学科	3位/14学科		
回答率	回答率97.6%	回答率87.8%	回答率88.5%	回答率93.0%		

演技・演出コース

	19.3卒	20.3卒	21.3卒	22.3卒	23.3卒	24.3卒	学部目標
①進路決定率	95.5%	96.2%	95.8%	96.4%	100.0%		90%以上
②就職率	95.5%	95.8%	95.7%	96.0%	100.0%		90%以上
③早期内定率	62.5%	75.6%	83.3%	76.9%	92.3%		70%-80%以上
④正規就職率	31.8%	66.7%	69.6%	72.0%	76.0%		80%以上 ※独自70%

舞台デザインコース

	19.3卒	20.3卒	21.3卒	22.3卒	23.3卒	24.3卒	学部目標
①進路決定率	100.0%	93.8%	92.0%	100.0%	96.6%		90%以上
②就職率	100.0%	93.3%	92.0%	100.0%	96.6%		90%以上
③早期内定率	62.5%	75.6%	48.0%	75.0%	70.0%		70%-80%以上
④正規就職率	66.7%	46.7%	52.0%	83.3%	65.5%		80%以上 ※独自70%

※青字表記は、学部目標を達成している数値。

■ 進路パターン

「進路パターン」は、各学科（各コース）が目標とする進路の職種を分類し、示したものである。進路は、学位プログラムを修得した先の目標でもあることから、カリキュラム・ツリーにも「進路パターン」（職種大分類）が表記されている。

以下、コース毎の「進路パターン」（職種大分類）、（職種小分類）、（企業モデル）と「進路パターンの比率（実績）」の推移を示した表となっている。

演技・演出コース

職種大分類	職種小分類	企業名	目標	18.3卒結果	19.3卒結果	20.3卒結果	21.3卒結果	22.3卒結果
①演劇系	俳優、声優、演出家、劇作家、劇団主宰、俳優養成所進学	芸能事務所、劇団文学座附属演劇研究所、新国立劇場演劇研修所、座・高円寺劇場創造アカデミー	15%	36.4%	33.0%	34.6%	18.2%	21.4%
②ミュージカル系	ミュージカル俳優、テーマパーク・キャスト、演出家、振付家、俳優養成所進学	劇団四季、オリエンタルランド、合同会社ユー・エス・ジェイ、芸能事務所、劇団	15%	13.6%	5.0%	7.7%	4.5%	0.0%
③マネージメント/コミュニケーション系	企画制作、広報、営業、接客、A/D、各種総合職	劇団四季、る・ひまわり、名古屋文化振興事業団、フレスカ、EIGHT	70%	27.3%	57.0%	53.8%	77.3%	75.0%
未決定				22.7%	5.0%	3.8%	0.0%	3.6%

舞台デザインコース

職種大分類	職種小分類	企業名	目標	18.3卒結果	19.3卒結果	20.3卒結果	21.3卒結果	22.3卒結果
①舞台デザイン系	舞台美術家、照明、音響プランナー、衣装デザイナー、大道具製作、舞台監督	劇団四季、金井大道具、つむら工芸、日本ステージ、シーエイティブロデューズ、オリエンタルランド、松竹衣装	30%	25.0%	22.2%	25.0%	22.7%	29.2%
②舞台スタッフ系	照明、音響スタッフ、劇場管理スタッフ	劇団四季、金井大道具、つむら工芸、CAT、シーエスエス総合舞台、オリエンタルランド、ピーエーシーウエスト、宝塚舞台	40%	35.0%	22.2%	31.3%	50.0%	25.0%
③マネージメント/サービス系	企画制作、広報、営業、接客、A/D、各種総合職	劇団四季、る・ひまわり、マザーシップ、ユナイテッド&コレクティブ、カクイチ、FOOLENLARGE	30%	35.0%	66.6%	31.3%	27.3%	45.8%
進学						6.3%	0.0%	0.0%

以下、コース毎の2022年3月卒と2023年3月卒の進路決定先一覧となっている。

演技・演出コース

職種大分類	目標	22.3卒結果	22.3卒 進路先・企業名	人数	23.3卒結果	23.3卒 進路先・企業名	人数
①演劇系	15%	21.4%	㈱SAKURA entertainment、 (株)カレイドスコープ、文学座 附属演劇研究所(2名)、新国立劇 場研修所、劇団たんぽぽ、	6	21.4%	大阪大学大学院人文学研究科、株式会社ア クロスエンターテインメント、㈱ホリプロ 「ハリー・ポッターと呪いの子」演出助 手、株式会社フィット、株式会社角川大映 スタジオ、株式会社テアトルアカデミー	6
②ミュージカル系	15%	0.0%		0	3.6%	劇団わらび座養成所	1
③マネージメント/コ ミュニケーション系	70%	75.0%	(株)アートディンク、トランスコスモス (株)、横見川神社、白ハト食品工業 (株)、和幸商事(株)、(株)ネクス テージ、(有)ムツミ商会、(株)Be Groove、(株)松栄堂、(株)アウトソー シング、(株)オクタゴン、(株)スター トワーク、(株)セノン(2名)、(株)マ キュリー、社会福祉法人敬愛学園、(株) 平八茶屋、長期アルバイト(4名)	21	75.0%	シミズ薬品株式会社、株式会社都筑製作 所、株式会社総合警備保障、株式会社セノ ン、株式会社グイス、株式会社LAVA International、Lesis English Sunshine Coast、株式会社キャン、フタバウェディ ング株式会社、株式会社ティーツー、株式会 社セノン、株式会社さんじやグループ、株 式会社CLOVER、株式会社コム・デ・ギ ャルソン、株式会社ビックモーター、株式 会社ジェイオーダー、似鳥(中国)投資有 限公司、株式会社マキキュリー、株式会社星 野リゾート、株式会社アローズコーポレー	21

舞台デザインコース

職種大分類	目標	22.3卒結果	22.3卒 進路先・企業名	人数	23.3卒結果	23.3卒 進路先・企業名	人数
①舞台デザイン系	30%	29.2%	(株)宝塚舞台、(株)ファイブエス、関西舞台 (株)、藤和那須リゾート(株)、(株)アートブ レーンカンパニー、※とわづくり(株)2名、	7	31.0%	株式会社BLAZE、※四季株式会社、 株式会社衣彩、※株式会社トゥ ミックス、株式会社宝塚舞台、※株 式会社オーベロン、テレビ朝日映像 株式会社、株式会社俳優座劇場、※ 舞台監督・中西輝彦氏に師事	9
②舞台スタッフ系	40%	25.0%	(株)ソルサウンドサービス、(株)ジャトー、丸 茂電機(株)、(株)俳優座劇場、(株)ステー ジワークURAK、(株)YTJ	6	37.9%	株式会社ひょうごT2、株式会社アン トラクト、株式会社ライティングカ ンパニーあり組、※合同会社 ユー・エス・ジェイ、Rise Enter Design株式会社2名、森羅科技文化 発展(広州)有限責任公司、株式会 社東豊座カンパニー、※株式会社 キョードー大阪、株式会社 ycoment、株式会社つばさレコーズ	11
③マネージメント/サー ビス系	30%	45.8%	DAIWA CYCLE(株)、(株)LAVA International、日研トータルソーシング(株)、 (株)メディアコンサルティング、(株)グローバ ルプロデュース、(株)アマナ、(株)キャン、 リード・アリュス(株)、(株)Norms、(株) Rejet、※ネイルサロン	11	27.6%	Activ8株式会社、株式会社フィルオブ・ワー ク、※晴明神社、市民生活協同組合ならこ ぼ、株式会社ロマンライフ、株式会社エヌ アイ・シー、京石産業株式会社、株式会社ア ベックスシステム	8
進学		0.0%			0.0%		0

② 進路決定率と進路指導力の改善

本学科では、学生に向けた「キャリア・ガイダンス」の内容を各専任教員も把握していることを前提としてキャリア指導に当たっている。毎月の「学科会議」において、次のことを議案に盛り込んでいる。①進路決定状況 ②担当する学生の就活進捗状況、就活状況が芳しくない学生の共有 ③大学、または外部で実施される就活イベントの共有と担当する学生のイベント参加状況 また、「学科会議」以外でも、各教員のネットワークを迅速かつ効果的に活用するため、専門分野の求人情報等を Slack で共有するようにしている。

近年、各企業が早期選考する傾向にあることから、3年次のインターン参加を重要視し、大学においては「夏インターンの参加率 60%」を目標に掲げている。学科でも就活と並行してインターン参加率の向上に努めている。具体的には、学科会議の場で就活と同様

に次のことを話し合っている。①学科全体の参加率 ②担当する学生の参加状況の共有
③各教員のネットワークを使ったインターン情報の共有

3年次、4年次ともに担当教員がキャリア指導に当たっているが、「進路決定率向上」、「進路の質向上」、言い換えれば「学生一人一人の人生の質向上」のために、可能な限り情報共有し、相互協力しながら進めるようにしている。

3年次(24卒)夏インターンシップ調査の結果は、以下の通りとなっている。

	在学 者数	9月アンケート回答状況			インターン参加状況				インターン応募状況				前年10月末日(p)		前年10月末日(p)		前年度 参加者	
		回答	不回答	回収率	参加者	5社以上	参加率	5社以上	応募率	5-9社	10社以上	応募率	5社以上	参加率	応募率	参加者 5社以上		応募者 5社以上
舞台芸術学科	50	49	1	98.0%	26	2	52.00%	4.00%	46	12	6	92.0%	40.0%	-13.6	6.1	0.9	-29.9	40.0%
舞台デザイン	23	27	1	96.4%	13	2	64.30%	7.10%	27	7	3	96.4%	35.7%	1.4	16.4	4.3	-12.9	32.1%
演技・演出	22	22	0	100.0%	8	0	36.40%	0.00%	19	3	5	86.4%	45.5%	-32.6	-6.7	-3.4	-30.4	50.0%

③ 進路の質向上のための学部目標の達成状況

ここからは、「進路決定率」、「正規内定率」、「進路満足度」の結果について検証していく。

■進路決定率：98.2%（舞台デ：96.6% 演：100%）

3年間をコロナ禍で過ごしたにもかかわらず、専門就職率も伸長させつつ「進路決定率」を高水準で維持できた。これは、各教員のキャリア指導力と2コースともに実施している初年次「ロールモデル研究」（「コラボレーション基礎」授業内）から3年次「キャリア研究」（「演技・演出V」、「舞台デザインV」）までの体系化された授業が奏功した結果だと考える。

■早期内定率：80.4%（舞台デ：70.0% 演：92.3%）

「学科学目標」の70%を超える結果となった。特に演技・演出コースは92.3%と過去5か年で最高値となった。3年次に「一般就職のインターンシップ参加」に力を入れたこと、また、非常にまとまりが良く、いずれの課題にも真摯に取り組む学生が多かった学年だったことがこの結果に結びついていると考える。

■正規就職率：70.4%（舞台デ：65.5% 演：76%）

学科学目標の70%は達成できた。

特に演技・演出コースでは過去5か年で最高値となった。要因としては②と同様のことが考えられるほか、一般就職の場合には「正規就職」を目指す指導を徹底していることが考えられる。舞台デザインコースに関しては、専門就職率が向上すると場合によっては非正規率が高くなる。この点に関しては、正規就職率だけで判断するのではなく、満足度等との相関も考慮すべきと考える。

■3年次夏インターン参加率：65.6%（舞台デ 62.9% 演：69%）

学部目標を達成することができた。2コースともに、3年前期の「キャリア研究」（「演技・演出V」、「舞台デザインV」）の中でインターン参加を促進していることが要因と考える。

特に専門企業でのインターンを促進している舞台デザインコースは、授業内で「企業研究」も含めたインターン促進を実施しており実際の就職に結びついている。

懸念すべき点としては、演技・演出コースの24.3卒の夏インターン参加率が36.4%となったことだ。過去4か年ほど同じ授業内で同様の指導をしているが参加率にばらつきが見られる。今後は授業内において、ESの提出を促すだけでなく、就活同様に業種や企業規模の幅を広げてESを提出する意識付けを強調するなど指導法の改善が必要だと考える。

進路満足度：91.9%

過去4か年で最高値となった。舞台芸術や芸能の業界全般がコロナ感染拡大の影響を大きく受ける中、2コースともに専門就職や専門進学の数値を落とすことなく着地できたことが要因と考える。特に舞台デザインコースでは、「宝塚舞台」、「俳優座大道具」、「劇団四季」等の業界を代表する企業にトップランナーたちを送り出し、「進路の質」にも向上が見られた。演技・演出コースでも、アクロスエンターテインメント、フィットといった有力芸能事務所に卒業生を送り出せたほか、現在、注目度の高い「ハリー・ポッター」ロングラン公演の演出助手を輩出できた。また、進学においても大阪大学大学院（舞台芸術関連）やミュージカルの老舗劇団「わらび座」に送り出せた。

一方、進路満足度調査において、「就職先満足度」を問う質問に対しネガティブ回答した卒業生については、以下の通りである。

・ネガティブ回答した舞台デザインコース1名は、1年以上インターンとして働いた芸能音楽事務所に就職した。長くインターンとして働く中で会社や仕事内容の短所が見えてきたが、望んでいた芸能関連の企業には合格できず、結果としてインターンから社員に切り替わる形で就職した。この経緯がネガティブ回答に繋がっていると考える。→「就業先への満足度」にもネガティブ回答。

・ネガティブ回答した演技・演出コース1名は、大手企業（星野リゾート）に就職した。これには、「俳優を続ける道に進みたかったが叶わなかった」といった演技・演出コース特有の心理が影響していると考えられる。一方で、演技・演出コースでは、オーディション活動を継続したい場合はアウト・ソーシングを選択するケースが多いことから、アウト・ソーシング系に就職したケースは、比較的満足度が高い傾向にある。

「プロセス・結果満足度」を問う質問に対しネガティブ回答した卒業生については、以下の通りである。

舞台デザインコース2名について。

- ・就活に挫折し「就職しない」と言っていた学生を教員が説得し非正規就職が決まった。
- ・専門就職はできたが第一希望の企業に就職できなかった。

演技・演出コース2名について

・ネガティブ回答の2名は、大手企業への就職が決まったが、本命は芸能事務所に所属することだったためネガティブ回答になったと考えられる。→うち1名は「就業先への満足度」にもネガティブ回答。

④ 自己評価

本学科は、「インターンシップ参加率」、「進路の質の向上」といった点において多少の課題が残るものの、2021、2022年度は、学部「人材育成目標」のすべての項目において目標数値をクリアできている。これを踏まえ、概ね問題なく「学部目標」は達成できていると考える。

ここからは、本学科が掲げている「進路パターン」とパターンごとの比率目標について述べていく。以下、それぞれのコースの「進路パターン」と比率目標、実績である。

【演技・演出コース】

- ・演劇系（専門就職）15%（21年度実績：21%、22年度：18%）
- ・ミュージカル系（専門就職）15%（21年度実績：0%、22年度：3.6%）
- ・マネジメント／コミュニケーション系（一般就職）70%（21年度実績：75%、22年度：75%）

【舞台デザインコース】

- ・舞台デザイン系（専門就職）30%（21年度実績：29%、22年度：31%）
- ・舞台スタッフ系（専門就職）40%（21年度実績：25%、22年度：38%）
- ・マネジメント／サービス系（一般就職）30%（21年度実績：46%、22年度：28%）

「進路パターン」を専門就職／一般就職で分けると、その目標比率は、次の通りとなる。

- 演技・演出コース：専門就職 30% 一般就職 70%
- 舞台デザインコース：専門就職 70% 一般就職 30%

別の調査によると、入学時の進路目標は以下の通りとなっている。

- 演技・演出コース：俳優、または声優志望 70%～80%
- 舞台デザインコース：舞台スタッフ、デザイナー 70%～80%

つまり、舞台デザインコースは、入学時の志望とほぼ同程度の進路目標を設定しているが、演技・演出コースは、数値が逆転していることになる。2コースの目標比率の設定に関しては、その中身（職種小分類）の難易度を鑑み、各々妥当な比率だと考えている。し

かし、それらの達成度を検証すると、舞台デザイン・コースは、21年度はコロナの影響から低い数字になっているが、22年度は概ね達成できている。一方で、演技・演出コースは、専門就職に俳優養成所等「進学」も含んでいることから、ある程度高い数字になっているものの、それらを除くと遠く目標比率に達していないことがわかる。

こうした結果を踏まえ、演技・演出コースは、進路決定率90%以上を恒常的に維持しながら、専門就職率を高めていく工夫と努力が必要だと考える。もちろん、学部「教育目標」にある「芸術の力を社会の変革に活かす人材の育成」とは、必ずしも「芸術の力を芸術家として社会の変革に活かす」という意味ではないことは十分承知している。学生には、プロの俳優、声優になることがいかに難関なのか、責任上しっかりと教えていかなくてはいけない。従って、現在本学科で徹底している「俳優、声優希望者は、専願するのではなく、必ず一般就職の就活も並行する」ことを緩めるつもりはない。加えて、演技や演劇を修学して得た学びを活かせる職種を積極的に開拓していかなくてはいけない。しかし、その一方で、学生が真の目標を達成できる教育力を探求していくこともまた、大学に課せられた義務だと考える。

V 内部質保証

1 学習成果・教育成果の検証方法

本学は、「京都芸術大学学則⁷²」第1条第4項において「本学は前項（大学使命・目的、各学科の教育目標）の目的を達成するために、教育研究活動等の状況についての点検および評価を行う。」と規定している。また、「京都芸術大学 自己点検・評価に関する規定」を定め、大学運営における「教育計画」「事務局事業計画」「教育活動点検・評価」「大学機関別認証評価受審」のそれぞれについて内部質保証体制を以下の通り規定している。

（以下、教育活動に関するものを抜粋）

（1）教育計画の自己点検・評価は、学長会のもで行うものとする。

（3）教員の教育活動点検・評価は、学長のもとに設置される教育活動委点検委員会により行うものとする。

教育計画の実施計画は以下の通り規定している。

（1）教育計画

- ・学科、専攻毎に前年度の点検・評価を実施し、代表教授会において報告
 - ・前年度教育活動の点検・評価結果をもとに学長会において次年度方針を決定
 - ・次年度方針に沿って学科、専攻毎に次年度計画を策定
 - ・各学科・選考との面談等を経て学部長、研究科長が次年度計画を承認
 - ・学園事業計画として取りまとめ、理事会・評議員会にて審議決定
- （「京都芸術大学 自己点検・評価に関する規定⁷³」より抜粋）

「教育計画」では年度毎に「学部方針」が策定され、各学科は、「教育」、「進路支援」、「学生募集」、「学科運営」等の項目について、「アセスメント・ポリシー⁷⁴」に則して集められた多角的なデータを活用しながら昨年度の分析・検証を行い、次年度計画（改善施策）を策定していく。

本学科では、年度毎の「教育計画・学科目標」にあたり、学科会議、コース会議の中で各項目の検証や協議を行い、改善施策（学科目標）の策定に繋げている。

2 学科組織レベル・教員個人レベルでの自己点検・評価

既述の「教育計画・学科目標」策定における検証が学科組織レベルの自己点検・評価の機会となっている。

教員個人（専任教員）の自己点検・評価は、本学「教員業績評価制度」に則して実施されている。2021年度より業績評価システム「カオナビ」が導入され、個人と学科の評価点を合わせて「教員業績評価」とされる。学科の評価点は、「学科等単位評価」によって決

定される。「学科等単位評価」は、「教育」「学科運営」「学生募集」「進路」等における年度毎の学科成果が50点満点で数値化される。個人評価は、「教育計画」を基に、各教員が個人目標を設定し、翌年度に実施する振返りを経て学科長が評価し、学部長がそれを承認している。また、年度毎の目標設定時、振返り後には、学科長と各教員とで1 on 1（面談）が実施され、それらの内容の修正等が話し合われる。なお、目標設定は、既述の通り、「教育計画」にある「学科教育方針」をベースとして設定されることから、大学全体の内部質保証と個人レベルでの自己点検・評価が密接に結び付けられる。

客員教授、非常勤講師との「学科教育方針」共有は、以前は「講師会」の場で行われていたが、コロナ感染拡大を受けて「講師会」開催が不可能となったため、代わって各 Semester の授業開始時と終了時に学科長と学科事務担当が各教員と個人面談を実施している。授業開始時の面談では、「学科教育方針」に加え、学生ガイダンスの内容を教員用に適用し、カリキュラム全容を含めた学科教育について話している。授業終了時には、主に成績評価ガイドライン、授業改善アンケートについて話している。

3 自己評価

本学では、1本文中で記述の通り、大学使命、目的を達成するために年度毎に学部方針が策定されている。その後、学部方針に則した「教育計画・学科目標」が学科レベルで組織的に策定されている。また、2で記述の通り、「教育計画・学科目標」を基に、「教員業績評価」の個人目標が設定され、翌年にはその成果、課題が評価されている。客員教授、非常勤講師においても、個人面談の場で学科教育方針等の情報が十分に伝達され共有できている。

よって、学修成果・教育成果を検証し、適切な組織体制のもと、教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけられていると考える。

おわりに

〈自己点検・評価を振り返っての所感〉

「自己・点検評価」を通して、2007年に創設されてからの舞台芸術学科を振り返ることができた。また、私事ではあるが、学科が創設された2007年に着任した私にとっては、学科だけでなく私自身を振り返る有意義な機会にもなった。新設当時の舞台芸術学科は、「学生募集」が振るわず、また「進路決定率」も全学科の中で最下位を争う状態だった。それが、2022年度は、「学科等単位評価」において最高値の成績となった。これは、着任以来ともに学科運営に携わってくださった学科教職員全員の努力の賜物である。学科長として感謝の念に堪えない。

2024年度からVISON2026⁷⁵に則した新たなカリキュラムが始動する。現在、学科教職員が一丸となってカリキュラム作成に取り組んでいる。この節目に、「自己点検・評価」を通して、学科の現状をつぶさに知り検証することで、新たなビジョンを描く礎が築けたのは、有益だったと感じる。さらには、「自己点検・評価」がポスト・コロナ時代を迎えた今であったこともタイムリーだったと感じる。「舞台芸術」の業界は、コロナ感染拡大に翻弄されたが、「自己点検・評価」は、パンデミックから解放された今後の「舞台芸術」と「舞台芸術学科」の相関を展望する好機となった。

〈学科の長所と捉える点〉

一回性の芸術（ライブ・アート）における協働は、実に困難なプロセスを抱えている。にもかかわらず、舞台芸術学科は、授業発表公演、卒業制作公演、自主企画公演など年間10作品を優に超える公演を実施している。また、これらの公演活動は、コロナ禍でも衰えることがなかった。これら公演活動を含めた学科教育を通して、学生たちは、「教育目標」としている本質的な協働力を修得している。これは、本学科が高い「進路決定率」を維持していることから証明されている。さらには、協働による創作活動は、学科魅力でもあり訴求力にも繋がっている。これは、本学科への志願者数増加からも証明されている。

〈学科の短所と捉える点〉

入口と出口に関しては、優れた成績を維持している本学科だが、唯一の短所は、改善傾向にはあるものの「離籍率」が高いことである。「おわりに」の冒頭でも触れたように、本学科は当初から入口や出口の数値が良かったわけではない。様々な改善や方策を加えることでここに辿り着いた。「離籍率」についても、改善に向けて初年次教育や学修支援の見直しなど積極的に行ってきたが、初年次離籍率は改善された一方で2年次以降の数値を大きく下げるには至っていない。

離籍者の大半は、人間関係の拗れや心身の不調が原因で授業や課外稽古に出席できない、といったことを「退学理由」に挙げている。つまり、高度な協働力を修得できる創作活動が学科の長所であると同時に、学科の短所にもなっている。

〈上記の長所を伸ばし、短所を改善するための将来に向けた発展方策（改善案）〉

長所と短所が共通していることは難題ではあるが、「舞台芸術」の特性を考えた時、高度な協働はその成立に不可欠であることを念頭に置いて発展方策を講じる必要がある。長所を伸ばすために、さらなる環境整備、人的ネットワークの構築を進めていきたい。また、扱うジャンルやスタイルも社会と学生のニーズに応え、2.5次元等含め幅を広げていきたい。さらには、キャラクター・デザイン学科、情報デザイン学科など他学科と学際的な活動を展開することで、オリジナル作品や新たな工学的技術を使ったライブ・アートの創出を試みたい。

一方、短所改善としては、既に「体験授業型選抜入試」の授業内容や評価基準の見直しをはじめ、「協働力修得」を目的とした初年次科目の導入、連続欠席者との個人面談など実施してきた。「卒業研究・制作」（卒業制作公演）に関しても、教員が座組形成プロセスを管理する仕組みに変更した。これらの施策を通して気付いたことは、やり過ぎると学生の主体性を損ね、当初の目的と矛盾が生じることだ。そこで今後は、協働に馴染めない学生が一定数存在することを前提として、そうした学生には、個人研究に移行し単位修得できるカリキュラムをつくり、提供していきたい。

〈将来構想〉

最後に、高等教育機関における舞台芸術学科の「役割」について触れておきたい。欧米、特にアメリカやイギリスにおいては、高等教育機関での実践的な舞台デザイン、演技プログラムは、舞台人、または俳優養成機関として機能している。一方、日本では長らく、専門学校や劇団等が併設する俳優養成所がその役割を担ってきた。しかし、大学進学率の向上、また養成所の母体である「新劇」の衰退等を背景に、2000年度以降、日本でも舞台芸術学科または、それに類した学科を新設する大学が増えている。そして、これらの新設学科には、専門学校や俳優養成所に代わるプロ養成機関としての機能を期待して学生が入学してくる。では、日本の大学の舞台デザイン、演技プログラムは、こうした期待に応えることができているのだろうか。舞台デザイン領域においては、本学科含めて一定程度の実績をあげている。演技領域はというと、十分には応えられていないのが実情だ。本学科 演技・演出コースは、さらにプログラム内容を充実させること、また業界と堅固なネットワークを築くことで俳優養成機関としての役割を果たしていきたい。もちろん、俳優が狭き門だという理由だけでなく、「演技」という学術領域の社会的信頼性向上のためにも、「演技」修得者に相応しい職業の開拓に努め、進路決定率を下げることなくコースを運営していきたい。

本学舞台芸術学科は、二兎を追う学科でありたい。

未筆ながら、外部評価委員の方々には、ご多忙の中、大変長い報告書をお読みいただき、貴重なご意見、ご評価を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

2023年8月
京都芸術大学 舞台芸術学科
学科長 平井愛子

【注】

-
- 1 「京都文藝復興」
<https://www.kyoto-art.ac.jp/info/philosophy/>
 - 2 「藝術立国 一平和を希求する大学を目指して一」
<https://www.kyoto-art.ac.jp/info/phophy/>
 - 3 「京都文藝復興」
 - 4 『瓜生山学園三〇年史』 瓜生山学園三〇年史編纂委員会、2010年、P389
 - 5 『瓜生山学園三〇年史』 瓜生山学園三〇年史編纂委員会、2010年、P357
 - 6 「京都文藝復興」
 - 7 「京都文藝復興」
 - 8 京都芸術大学 在学生専用サイト
<https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/guide/policy/>
 - 9 「京都文藝復興」
 - 10 「藝術立国 一平和を希求する大学を目指して一」
 - 11 『瓜生山学園三〇年史』 瓜生山学園三〇年史編纂委員会、2010年、P357
 - 12 2劇場とも2000年に創設された。春秋座は可動式の花道や宙乗り設備を備えた約800席の歌舞伎劇場。初代芸術監督は、三代目市川猿之助。studio21は、ブラックボックス型の小劇場。
<https://k-pac.org/>
 - 13 『瓜生山学園三〇年史』 瓜生山学園三〇年史編纂委員会、2010年、P358
 - 14 2001年に京都芸術劇場春秋座、studio21を管理・運営するために発足。「創造の現場」と「学術研究」の有機的な結び付きを目的としている。春秋座公演の制作業務のほか、2013年度より文部科学省「共同利用・共同研究拠点事業」の認定を受け舞台芸術の研究拠点として機能している。
<https://www.kyoto-art.ac.jp/info/institution/stage/>
 - 15 『瓜生山学園三〇年史』 瓜生山学園三〇年史編纂委員会、2010年、P358
 - 16 ロシア、ソビエト連邦の演劇人コンスタンチン・スタニスラフスキー（1863-1938）によって提唱された演技理論。欧米のリアリズム演劇、映画等における演技に多大な影響を与えた。特に英国、米国では、演技プログラムを有する高等教育機関の多くがスタニスラフスキー・システムを基礎とした演技理論を採用している。
 - 17 『瓜生山学園三〇年史』 瓜生山学園三〇年史編纂委員会、2010年、P388
 - 18 京都芸術大学 在学生専用サイト

-
- <https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/guide/policy/>
- 19 舞台芸術学科チラシ 2024 年度募集版
https://drive.google.com/file/d/1O4eMZF_KkQnb-0ynKVADs9E8x7BjAt9p/view?usp=sharing
- 20 文化芸術推進フォーラム 調査報告書「新型コロナ感染拡大における文化芸術界への甚大な打撃、そして再生に向けて」(2021年7月発行)
http://ac-forum.jp/wp-content/uploads/2021/07/forum_report2021.pdf
- 21 「売上7割減でも演劇一筋の大方針をつらぬく劇団四季の現在地」
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/4999593f16e55c5506b2737a37b0dd582b81c450>
- 22 ぴあ総研ホームページ
https://corporate.pia.jp/news/detail_live_enta20221005_25.html
- 23 「[「芸術立国 一平和を希求する大学を目指して」](#)」
- 24 「[「京都文藝復興」](#)」
- 25 「[「京都文藝復興」](#)」
- 26 「入試の手引き&学生募集要項」(冊子) 2024年度版 P50
https://www.kyoto-art.ac.jp/admission/pdf/guidebook_2024j_4.pdf
- 27 京都芸術大学 「入試情報」
<https://www.kyoto-art.ac.jp/admission/policy/>
- 28 2021年度自己点検評価報告書 P17
<https://www.kyoto-art.ac.jp/info/disclosure/self/pdf/2021.pdf>
- 29 2021年度自己点検評価報告書 P18-P20
- 30 「入試の手引き&学生募集要項」(冊子) 2024年度版 P50
- 31 京都芸術大学 「入試情報」
<https://www.kyoto-art.ac.jp/admission/list/>
- 32 京都芸術大学 「入試情報」
<https://www.kyoto-art.ac.jp/admission/policy/>
- 33 舞台芸術学科教育目標
https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/guide/subject/pdf/2018_2019/10-1.pdf
- 34 「[「入試の手引き&学生募集要項」](#)」(冊子)
- 35 「目指すべき教員像・教育業績評価指標」非公開情報のため、必要な部分のみ引用
- 36 京都芸術大学 FD委員会規定(目的)第2条
- 37 [京都芸術大学「FDのてびき2022」](#)
- 38 [京都芸術大学「FD活動報告書2022」](#)
- 39 [京都芸術大学「FDのてびき2022」](#)
- 40 [舞台芸術学科チラシ 2024年度募集版](#)

-
- 41 [studio21 ハンドブック](#)
- 42 芸術教養センターが開講する「日本文化科目群」の中の演習科目。「邦楽囃子」、「常磐津」、「能」、「狂言」等の授業に舞台芸術学科の教室を貸出。
- 43 学科等単位評価 非公開情報のため評価項目等の詳述は避ける
- 44 デイプロマ・ポリシー（学位授与の方針）
<https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/guide/basic/skill.php>
- 45 [カリキュラム・マップ、ツリー](#)
- 46 [カリキュラム・マップ、ツリー](#)
- 47 [DPA（DP 達成度評価）活用マニュアル](#) 2021年5月、P17
- 48 [DPA（DP 達成度評価）活用マニュアル](#)
- 49 [DPA（DP 達成度評価）活用マニュアル](#) 2021年5月、P15
- 50 [DPA（DP 達成度評価）活用マニュアル](#) 2021年5月、P21,22
- 51 [DPA（DP 達成度評価）活用マニュアル](#) 2021年5月、P23,25
- 52 京都芸術大学 在学生専用サイト
<https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/guide/basic/skill.php>
- 53 学生が京都芸術劇場 春秋座／studio21 で作業するために必須となるライセンス。上位ライセンス取得のための基礎としている。また、安全管理を徹底するため、同ライセンスは、毎年更新のための講習を受けることを必須としている。
- 54 2022年度は、（株）ネルケ・プランニングの代表取締役社長を招聘。同社は、『テニスの王子様』、「刀剣乱舞」をはじめとする2.5次元ミュージカルを製作する国内最大手の演劇制作会社。
- 55 2019年度に本学科学科長が授業を実施。
- 56 オンライン開催となった2021年度に本学科は、2年次生公演『グリークス』を出展。
- 57 [『シラバス作成のてびき』 P2](#)
- 58 [2022年度舞台芸術学科全授業シラバス](#)
- 59 [「京都芸術大学芸術学部 成績評価に関するガイドライン」](#)
- 60 [『ループリック作成のてびき』 教学支援三課作成](#)
- 61 [ループリック](#)
- 62 [「京都芸術大学芸術学部 成績評価に関するガイドライン」 第4条](#)
- 63 [「京都芸術大学芸術学部 成績評価に関するガイドライン」 第5条](#)
- 64 大学設置基準 21条の2
<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=331M50000080028>
- 65 京都芸術大学 在学生専用サイト
<https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/guide/basic/class.php>
- 66 [舞台芸術学科チラシ 2024年度募集版](#)
- 67 舞台芸術研究センター 「共同利用・共同研究拠点事業」

<https://k-pac.org/openlab/#kyoten>

68 2022年度より導入された学修サポートシステム。学生は、このシステムを使って施設利用の申請などができる。教員は、各学生の奨学金受給の有無など個人情報をはじめ、成績状況を確認できる。個人面談、修学面談の報告もこのシステムを使用している。

69 [DPA \(DP 達成度評価\) 活用マニュアル](#)

70 [ループリック](#)

71 学園中期計画 VISION2021

72 「京都芸術大学学則」

<https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/bylaw/>

73 「京都芸術大学 自己点検・評価に関する規定」(実施計画)第3条

74 京都芸術大学 アセスメント・ポリシー

<https://www.kyoto-art.ac.jp/info/policy/>

75 VISON 2026

<https://www.kyoto-art.ac.jp/info/disclosure/pdf/vision2026.pdf>